

仙教用語集

竹下 博 編著



竹下博

仏教用語集

竹下 博 編著



ブッダの旗と子供たち
(ネパールのブッダ降誕祭)

無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも値遇こと難し。

われ今見聞し受持することを得たり。

願わくは如来の眞實義を解したてまつらん。

愛語 あいご

やさしい言葉 ことば ということ。

愛染明王 あいぜんみょうおう

密教 みつぎょう で信仰 しんこう されてきた五大明王 ごだいみょうおう のなかに愛染明王 あいぜんみょうおう がおられます。

愛染 あいぜん とは、ものごとくに愛着 あいちゃく し、それにとらわれて染 そま る心 こころ という意味 いみ です。

愛染明王 あいぜんみょうおう は人間の愛欲 あいよく と貪染 とんぜん の心 こころ をそのままで悟り さと の世界 せかい へ導 みちび くみ仏 ほとけ であります、經典 きやうてん には、金剛薩埵 こんごうさだ とか、金剛王 こんごうおう、金剛愛菩薩 こんごうあいぼさつ の化身 けしん が愛染明王 あいぜんみょうおう だとあります。

愛欲 あいよく の広海 こうかい に沈没 ちんぼつ し

恩愛 おんあい・貪欲 とんよく の煩惱 ぼんのう の深き ふか ことをいう。

愛論見論 あいろんけんろん

正しく ただ ない無益 むえき な言論 げんろん をいう。

愛論 あいろん は愛着 あいちゃく により起 お こる誤 あやま った言論 げんろん、見論 けんろん は道理 どうり にくらい偏見 へんけん による言論 げんろん

悪あく

生命せいめいのあたりまえの歩あゆみを止とめること、またはあとへもどること。

悪事あくじ

いろいろな悪わるい行おこない。

悪邪あくじゃ無信むしん盛時じょうじ

五濁ごじよくが盛さかんになり、仏法ぶつぽうを聞きいても疑うたがいそしるばかりで信しんじないものが多おほくなる時代じだいのことをいう。

悪耳あくに

迷まよいの心こころ。

悪人あくにん成仏じょうぶつ

どんな悪人あくにんにもかならず仏性ぶつじょうはあるのですから、仏ほとけの法ほうに触ふれて魂たましいの表面ひょうめんにかかっていた曇くもりがぬぐわ
れていけば、中なかからほんものの自分じぶんすなわち仏性ぶつじょうが輝かがやきだしてくるのです。

阿閼仏 あしゅくぶつ

梵語 ぼんご アクショーブヤの音写、無動、無瞋恚と漢訳する。東方の現在仏。
昔、大日如来のもとで発願・修行し、一切の瞋恚と淫欲を断つことを成就して、正覚を得、今現に妙喜世界にあつて説法しているという。

阿僧紙 あそうぎ

梵語 ぼんご アサンキヤの音写。数えることのできないの意で無数・無央数と漢訳する。
大きな数の単位を表す。

阿耨多羅三藐三菩提 あのかたらさんみやくさんぼだい

「阿耨多羅」——梵語 ぼんご 「アヌツタラ」という言葉を音写したもので、「アヌ」は「ない」
「ウツタラ」は「上」という意味ですから「阿耨多羅」で「この上ない」という意味になります、
「三藐」——「サミヤク」、これは同じとか「正しい」ということです、中国の仏教家は「正等」と訳しました。

「三菩提」——「サムボードヒ」、「サム」は「完全な」、「ボードヒ」は「覚り」ですが、ふつうには、「完全

な覚り」とはしないでただ「覚り」と訳しています。

以上で「この上なく正しく等しい覚り」——「正しく等しい覚り」というのは、時間とか、条件とかによつて動くことのない、ほんとうの智慧ということです。

・無上正真道

無上正遍知などと訳されますが本来は原語（梵語）の発音そのままの呪文であつて、なぜ中国語に翻訳しないでそのままになっているかといえ、翻訳者羅什の深い心づかいによるものです。

阿毘跋致

仏になるべき身となることなり。

阿弥陀仏（如来）

お釈迦さまは、「無量寿経」というお経の中で、こう話されております。

昔々一人の国王がいた、ある日、その国王が世自在王仏の説法を聞いて感激し、自分もこのような仏となつて人々を救おうと決意し、王位を捨てて僧侶になつた。

それから大変な修行をして、とうとう仏の次の位の菩薩になつた、そこでその菩薩（法蔵）は仏になるために四十八の願いをたて、「もしこの願いが成就しなければ、私は仏にはならない」と誓つた。

その四十八願の中の第十八番目の願いに、もし私が仏になったならば、誰でも心の底から、私のいる極楽浄土に生まれたいと念願して、たとえ十遍でも私の名をとனால்、必ず極楽に救いとなる。

もし一人でもこれに洩れるようなことがあれば私は仏にはならないというのがあある(撰取不捨)。

それからその菩薩はまた長い長い間修行をし、ついにその誓いを成就して仏になった。

その仏が阿弥陀仏である。

諸仏が持つている「如来の智慧」の本源をなす智慧が阿弥陀仏である、その無量寿仏の「威神光明」が「最尊第一」である様子について、經典(無量寿經)に十二の特徴をあげている。無量寿仏をば、無量光仏、無辺光仏、無碍光仏、無对光仏、炎王光仏、清浄光仏、歡喜光仏、智慧光仏、不断光仏、難思光仏、無称光仏、超日月光仏と号す。

阿弥陀仏の五智

1、仏智

2、不思議智

3、不可称智

4、大乘広智

5、無等無倫最上勝智

阿羅漢 あらかん

すべての煩惱ぼんのうを除きつくした者もの。

異 い

ものごとが変かわつていくありさま、変化へんかすることです。

意安樂行 いあんらくぎよう

心こころの持ちかたについての八つの戒めいまい

易行 いぎよう

平易な行法へい いぎよう ぽう。

阿弥陀仏の本願あみだぶつ ほんがんを信じて念仏しん ねんぶつすること。

易行道 いぎようどう

阿弥陀仏の本願力あみだぶつ ほんがんりきによつて浄土じやうどに往生おうじやうしてさとりをひらく他力たうりきの道みち。

易行の一門 いぎよう いちもん

自力の行によらないで阿弥陀仏の本願力によってさとりを得る淨土門のこと。
じりき ぎよう

一時警歎 いちじきようがい

「然して後に還つて舌相を撰めて、一時に警歎」とあります。
もく のち かえ ぜつそう おさ いちじ きようがい

これにはどんな意味があるかといえますと、声を出すというのは、教えを説くということを表しています。
そこで、すべての仏さまが一時に咳ばらいをされたということは、すべての教えは一つに帰するということ
意味なのです。(万教帰一)
いみ ほとけ いちじ せき ほんきようかい

一乗 いちじよう

結局「みんな仏になれるのだ」ということです。
けつぎよく ほとけ

一定 いちじよう

確かに定まったこと。
たじ きた

いちじようきゆうきよう きよくせつ

一乗究竟の極説

一切の衆生をことごとく仏のさとりに導く、一乗教の究極を説きあらわした教え。

いちじようだいちがんかい

一乘大智願海

一切の衆生をことごとく仏のさとりに至らせる、この上なくすぐれた阿弥陀如来の智慧の誓願のこと。

いちじようほつけ みようでん

一乘法華の妙典

一乗の理を明す「妙法蓮華經」のこと。

いちねんいつしん

一念一心

一念は信心のおこった最初の時、一心は二心（疑い）なく阿弥陀仏の仰せにしたがう信心のこと。

いちねんかんぎ

一念歓喜

本願を聞いて二心なくよろこぶ信心のこと。

親鸞聖人は、一念とは信心を得る時のきわまり、歡は身を、喜は心をよろこばせることと、いわれている。

いちねんきあいしん
一念喜愛心

一念の信心の内容をあらわす。

すなわち阿弥陀如来の救済を喜び愛でる心。

いちねんきようき
一念慶喜

二心なく、疑いなく所聞の法をよろこぶ。

いちねんさんぜん
一念三千

われわれの心というものは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、という六界をグルグルまわって、苦しみや悩みの尽きることはありません。

ところが、凡夫の心の中にも、ときおりは聖者のような念の湧くことがあります。

すなわち正しい道を学ぼう（声聞）とか、何か経験によってハッと正しい道を悟（縁覚）とか、人のため世のためにつくそう（菩薩）というような心のはたらきが起ります。

あるいはほんの希には、自分というものを、すっかり忘れた絶対慈悲の心（仏）になることが、あります。

そこでいま述べた凡夫の六界およびその上の聖者の四界を合せた十界についての教え。

いちねんしんげ
一念信解

仏の寿命の無限であることを、ほんのちよつとのあいだでも「なるほどそうだ」と信解することです。

いちねんたねん
一念多念

一念義とは、浄土往生は信心ひとつで決定する、またはひと声の称名で決定するとし、その後の称名を軽視する説。

これに対し、多念義とは、浄土往生は一生涯数多くの念仏を称え、臨終来迎をまつて往生が決定する説。

いちねんほつき
一念發起

疑いなき信心がおこること。

阿弥陀如来の本願を信する心が初めておこること。

いちねんほつきしよつじようしじゆう
一念發起正定之聚

すなわち往生を得、不退転に住す。

一 念無疑 いちねんむぎ

阿弥陀如来の本願を二心なく疑いなく信じること。

一 仏乗 いちぶつじょう

「いや、仏の教えに大乘も小乗もない、ただ一乗しかないのだ。みんな仲間同志のけんかはやめて、この一乗に従おうではないか。釈尊が『これこそ、いちばんすぐれたものだ』といってお説きになった最高の教え、真実の教えは、この法門だったのだよ」といって書きあらわされたのが、ほかならぬ「法華經」だったそうです。

一 味の安心 いちみ あんじん

阿弥陀仏より、ひとしく回向された安心であるから、人に応じてその内容が異なることなく同一であること。他力の信心の平等であること。

一 一切種智 いっさいしゅうち

・完全なさとり智慧、あらゆるものの真相を知りきわめる智慧。
・一切の存在について平等と差別、空と有を不二体に悟りつくす仏の智慧。

いっさいしゅじょうしつうぶつしやう
一切衆生悉有仏性

生きとし、生けるものには、すべて生まれながらにして仏となる種（仏性）があるということ。

いっさいち
一切智

あみだによらい
阿弥陀如来のこのうえない智慧。

すべてのことがらの真実を知る智慧。

いっしょうふしよ
一生補處

ぼさつ さいこうい
・菩薩の最高位

いっしょうぶつ
・一生だけすぎれば次生は仏の位につくという身。

いっしんいつこう
一心一向

た ぼとけ よきよう
他の仏や余行に心をかけず、もっぱら阿弥陀仏を信すること。

いっしんせんねん
一心専念

阿弥陀如来の本願を信してもつぱら称名念佛すること。

五つの音声

宮・商・角・徴・羽の五音。

威徳智

すぐれた徳をそなえた智慧。

威容顕曜

姿が莊嚴で、光り輝いていること。

因果

物事が起こる原因となるものを因といい、それによって引き起こされた結果を果という。ただし、仏教では物事が起こる原因には、果を生じさせる直接原因である因と、因を助成する間接原因である縁があるとし、因果というときの因は、因と縁を含めているのである。

この因と果を合せて因果という。

因行果徳体 いんぎょうかとかたい

念仏には阿弥陀仏の果上の徳がおさまる果分の行であるが、諸善は仏になるために積む因分の行である。

因行果徳対 いんぎょうかとかたい

諸善はさとりに至る因位の行であり、念仏は阿弥陀如来が因位の行を積まれて成就されている果上の徳である。

姪洗 いんしつ

みだらな欲望。愛欲のこと。

引接 いんじよう

浄土へ導き入れること。

引導 いんどう

迷える衆生を悟導に導くこと。

因位 いんじ

因地ともいう。

因の位という意で、果位に対する語。

菩薩が仏のさとりをひらくために、修行している間をいう。

阿弥陀仏の因位の名を法蔵菩薩と呼ぶ。

因縁 いんねん

因と縁。

結果をもたらす、直接原因(因)と間接原因または条件(縁)。

すべての存在は因と縁によって滅するものとする。

このように因縁によって事柄が生起することを因縁生とも縁起ともいう。

因縁の法 いんねんのほう

一切の法は因と縁とが和合して仮に存在する実体のないものであるという道理。

縁起のこと。

有^う

差別^{さべつ}

有^う為^い

梵語^{ぼんご}サンスクリタの漢訳^{かんやく}。

さまざまな原因^{げんいん}・条件^{じょうけん}(因縁^{いんねん})によつてつくられた生滅^{しやうめつ}変化^{へんか}するもの。
無^む為^いに對^{たい}する語^ご。

有^う為^いの心^{こころ}

何事^{なにごと}も自分^{じぶん}を中心^{ちゆうしん}にして考^{かんが}える心^{こころ}。

有^う為^いの法^{ほう}

因^{いん}と縁^{えん}により生^{しやう}じた諸現象^{しよげんしやう}をいう。

有^う縁^{えん}

自分じぶんに關係かんけいのあるもの。

有縁うえんの知識ちしき

深い因縁いんねんに結むすばれた仏道ぶつどうの師し。

有学うがく

阿羅漢果あらかんかまで至いたつていない聖者せいしやのこと。

有間心うけんしん

雜念ざつねんのまじつた心しん。

有後心うごしん

まだ後あとがあると思おもうゆつくりした心しん。

有情うじやう

梵語ぼんごサツトヴァの漢訳かんやく情じやう（こころ）を有ゆうするもの。

生きとし生けるものの意。

旧訳では衆生、新訳では有情と漢訳する。

優曇華

優曇は梵語ウドウンバラの音写、優曇鉢羅の略、優曇鉢華・優曇鉢樹ともいう。
雲瑞華と漢訳する。

桑科のイチジクの一種で三千年に一度だけ咲く花という。

仏の出世が稀なことや、めでたいことのおこる前兆を示す、喩えに用いられる。

有念

仏身・浄土の莊嚴相など具体的に示された仏徳を観想すること。
仏の形相などを心に思いうかべて観想すること。

優婆夷

女の在家修行者

優婆塞 うぱそく

男の在家修行者 おとこけしめきやうしや

慧 え

仏が一切のものの平等な面も知り分けておられること、すべてのものに共通の真理を見いだす力。

慧眼 えがん (えげん)

深い智慧によつてものごとの本体といえますか、ものごととの真実のありかたといひましようか、そう言うものを見分けることです、普通の人に見えないものや考え及ばないことを見通す眼。
智慧の眼。

慧解高遠 えげこうおん

智慧をもつて事理を了解することがすぐれていること。

回向 えこう

「回向」というのは、「ふり向ける」という意味です。

すなわち、本来自分が受けるべきはずの功德を、他へふり向けることです。

たとえば經典を誦誦すれば、仏の教えが深く心に植えつけられ、魂がきよめられますから、もともと読經ということとは自分自身の成道のためにする行であります。

ところが、これを祖先の靈前において行えば、自分が受けるべき功德を祖先に「ふり向ける」ことになり
ます。

祖先の靈の成仏を助けることになります。

だから、亡き人の靈前で読經することを回向というのです。

梵語パリナーマナーの漢訳。

回はめぐらすこと、向はさしむけること。

自ら修めた善根功德を、自らのさとのためにふりむける菩提回向、他の人々を救うためにふりむける衆生回向、空真如の理になつていく實際回向、の三種の回向がある。

回向利益他

衆生に功德を施して利益を与えること。

回心

心をめぐらすこと。

心をひるがえすこと。

心を改めること。

自力の心を捨てて他力の信に帰すること。

回心懺悔

自力の心をひるがえして、悔い改めること。

回心の行

その行業を回向して往生を願わねばならない自力行のこと。

あるいは自力の心をひるがえして、他力に帰せねばならない自力行のこと。

回施

阿弥陀仏から衆生にめぐらし施されること。

回向に同じ。

えぞしらぬ

とうてい理解できない。

依憑

よりどころとすること。

慧目

智慧の目

炎王光

自在に照すさかなな光

縁覚

独覚ともいい、いろいろな出来事を縁として無常を知り、世間を離れて生活をして自分だけの悟りを得た人、いいかえれば体験主義の修行者。

縁起^{えんぎ}

あらゆる現象は、平等な、一種の、エネルギー（力）からできているということです。

その「空（エネルギー）」が、ある条件（縁）によって寄り集まって、ある物質をつくっているのであって、その条件の違いによって、水ができた、空気ができたり、石ができた、人間の身体ができた、しているわけです。

そうして、その条件が変化すれば、その物質も分解して、ほかの形に変化します。

水は、高い熱という条件に合えば、水蒸気となって蒸発し、その水蒸気が冷たい空気という条件に触れば、雲となるのです、世の中のできごと、心のはたらきも、やはりそのとおりであって、ひとつとしてこの法則に、はずれるものはないわけです。

この法則を、釈尊は「縁起」ということばで説きになりました。

「縁りて生じ、縁りて滅する」というのは、「あることが起こるのも、ある物ができるのも、そのような条件（縁）があつてこそ生ずるのである。

その条件（縁）がなくなれば、そのことから、その物も分解してしまふのである」という意味です、これこそ、宇宙のあらゆる存在と現象をつらぬく真理であつて、実に、科学がこれ以上深くはいっていきなところまで、釈尊は直観によってみとどけておられるのです。

縁起観えんぎかん

釈尊しやくそんは、人間にんげんを中心としたこの宇宙うちゅうというものを、神かみがつくつたとか、神かみが支配しはいしているとか、いうのでなく、すべて縁起えんぎの關係かんけいによって觀かんじておられるのです。

縁起えんぎとは因縁いんねんであり、もつとくわしくいえば、因・縁・果・報ほうです。

この世の中よなかには、いつも變かわらず定さだまつた形で存在そんざいするものはひとつもない。

すべてのものはある原因げんいん(因いん)があつて、それがあある条件じょうけん(縁えん)に合あつたとき、その結果けっかがある現象げんじよう(果か)として現あらわれるのである。

そしてその「果か」は、かならずあとあとまで尾おを引ひくはたらき(報ほう)を残のこすものである。――

釈尊しやくそんは世の中よなかのすべてのものごとを、こゝ断だんじておられるのです。

円教えんぎよう

円満えんまん完全かんぜんな教おしえ。

仏教ぶつぎようのうちで最も完全かんぜんな教おしえ。

円融えんじゆう

それぞれのものが、その立場たちばを保持ほししながら完全かんぜんに一体いつたいとなつて互たがいに融とけあい、さまたげがないこと

円満えんまん 自在じざい であること。

円融えんにゆう 真妙しんみょう の正法しょうぼう

煩惱ぼんのう 即菩提じつぼだい、生死せいし 即涅槃じそくねはん という諸法しよほう 不二ふじ をさとする法門ほうもん。

円融えんにゆう 無碍むげ

煩惱ぼんのう と菩提ぼだい、生死せいし と涅槃ねはん が完全かんぜん に一つにとけあつて、へだてのなくなつたさとりとくの徳をいう。

閻魔エンマ

エンマは原語げんごの梵語ぼんごやマの音写おんしゃで、インドの古い神かみです。

死者ししゃの生前せいぜんの行為こうゐを審判しんはんし懲罰ちやうばつするという地獄じごくの主しゅたる神かみとされます。

仏教思想ぶつぎょうしきうもこの古代こだいインドの思想しきうを受け継つぎますが、仏教ぶつぎょうの經典きんげんによると地藏菩薩じざうぼさつの化け(変へ身しんとも説ときます。

厭離えんり 真実しんじつ

聖道門しやうどうもんの真実しんじつをいい、まず、この迷まよいの世界せかいを厭きらひ離はなれよつとする心こゝろを起おこして次つぎにさとりを願ねがふこと

往生治定 おうじょうじじよう

浄土に往生じようど いまうれることが決きまったこと。

応身 おうじん

救すくう対象たいしやうに相応そうおうしたすがた（姿相すがた そう）で現あらわれる仏身ぶつしんのこと。

往相回向 おうそうえこう

人間にんげんが浄土じようどの世界せかいへ往いく。

往相回向の心行 おうそうえこう しんぎやう

仏ほとけより回向えこうされた信心しんじんと称名しょうみやうのこと。

往益 おうやく

浄土じようどに往いき生うまれるという利益りえき。

往生おうじやうという利益りえき。

憶想間斷おくそうけんだん

阿弥陀仏あみだぶつをおもう心がとぎれること。



果か

生死せいしの苦界くかい。

カースト

釈尊しやくそん存命時ぞんめいじのインドでは、人間にんげんは四つの階級かいきゅう(カーストという)に分れていました。いちばん上はバラモンうえといって学問がくもんや宗教しゆうきやうや道德とくとくをつかさどる階級かいきゅう第二は、セッテイリこくおうといって国王こくおうや武士ぶしの階級かいきゅう第三は、ビシャだいいといって、農・工・商人のうこうしやうにんの階級かいきゅう第四は、スタラふかしよくみんといつて、不可触民ふかしよくみんの階級かいきゅうです。

戒かい

戒かいというのは殺生せつしようをしてはいけない、盗みぬすをしてはいけないというような戒めいさめです。

戒行かいぎ慧解ようえげ

戒律かいりつを守まもつて修行しゆぎやうすること、智慧ちえによる仏法ぶつぽうの了解りようかい。

改悔がいけ懺悔さんげ

自力じりきを悔くい改あらためて他力たうりきにまかせること。

開悟かいご

さとりを開ひらくこと。

戒師かいし

戒かいを授さずける師僧しそう。

戒律かいりつ

仏教者ぶつぎやうしやの生活せいかつの戒めいまし。

餓鬼がき

貪り欲張る心がかぎりなく起こってくる状態です。

貪る心が強ければ、その欲しがるものがいくらたくさん得られても、まだ欲しい、まだ欲しいと、とどまるところがないのです。

お金や物質だけではありません。

名誉に対する貪欲もあれば、人の愛情に対する貪欲もあります。

こうして、どこまでも貪り欲して満足することを知らないのが「餓鬼」です。

覚体

阿弥陀如来は完全に真理を体得されたかたであることをいう。

我見

自己中心の我執、我欲。

果後の方便

さとりを得た仏が衆生を導くたてとして菩薩となつて発願成道を再現すること。

阿弥陀如来は久遠の昔に成仏されたが仮に法蔵菩薩になり発願修行されたのは衆生を救うためのお手

まわしであるといふこと。

果遂の願

阿彌陀仏の第二十願。

果遂は「はたしとげる」ということで、一つは化土往生を、二つには第十八願への転入をはたしとげさせること。

羯磨

受戒の儀式のときに、いままでの身と心の経歴を告白した文章を書いて読みあげるものです。

我波羅密

ものごとがどんなに変化しても動くことのない絶対の存在である仏を信すること。

加備力

仏の慈悲により衆生に利益を与える力。

我慢 がまん

この「我慢」というのは、しんぼうという意味ではなく、が私の慢心まんしんです。すなわち、おれがおれが——と、いつも人の上に立ちたい心です。

迦陵頻伽 がりようびんが

梵語カラヴィンカの音写。ぼんご

妙声・好声・美音・妙音鳥などと漢訳する。みようせい こうせい びおん みようおんちよう

殻の中にいる時からよく鳴きその声は極めて美しいという。から なか ととき こえ きわ うつく

歓喜 かんぎ

「歓」は身をよろこばしむるなり。かん み

「喜」はこころによろこばしむるなり。き

観喜光 かんぎこう

瞋恚しんい（いかり）を除く光。のぞ ひかり

願行具足

浄土往生の因となる願と行業とが具わりとこのうこと。

観世音菩薩（観音）（観自在菩薩）（大士観世音）

世の人々の声を聞いてくださる菩薩。
悩める人々の音を観て解脱を得させる。

感徳

修行の結果、身に感じとる功德。

感応

通ずるといふのは、同じような心になることです。

我々が仏を思い出せば自然に我々の心が仏の心になつてくることをいふのです。

そうすれば、自然とお互いの心の中に暖かみが生じ、寛容の気持ちが生じてきます。

我をおしたてて角突きあう気持ちがとれて、和やかになつてきます。ですから、争いごとや闘いのさ中にあつても、ゆつたりした気持ちになり、お互いがそうなれば争いも自然に解決します。

観かん仏ぶつ

1. 正せいの観かん仏ぶつ

阿あ弥み陀だ仏ぶつを観かん想そうすること。

2. 雑ざうの観かん仏ぶつ

諸しよ仏ぶつを観かん想そうすること。

観かん法ぽう

心こころに仏ぶつ・浄じやう土ど等とうを観かんし念ねんする、
瞑めい想そうの实じつ践せん修しゆ行ぎやう法ぽう。

喜き

人ひとの喜よろこびを供ともに喜よろこんでやる心こころ。

機き法ぽう一いつ体たい

機きは衆しゆ生じやうの往おう生じやう、法ぽうは仏ぶつの正せい覺かくを指さし、仏ぶつの正せい覺かく成じやう就じゆのままが衆しゆ生じやうの往おう生じやう成じやう就じゆである道どう理りをいう。

鬼子母神

鬼子母神は、インドではカリティと呼ばれた女神です。

鬼子母神は、インドの王舎城に出てきて幼児を食べました。

お釈迦さまが鬼子母神の子供を隠すと、あわてて探して歩く、居ないので嘆き悲しみました。

ここで初めて子供を食べられてしまった母親の気持ちがわかったのです。

結局、鬼子母神はお釈迦さまに従い、今までの自分の非を悔い以後安産と子供の保護に当たり、子供の

養育を助けることを約束しました。

このように、子供に害を与えた鬼のような女が、子供を慈しむ母のような女神に変わったのです。

喜捨

自分というものを忘れて人のためばかりを考えてやる気持ちです。

疑網

疑うところを網にたとえるなり。

逆化

相手（あいて）をボロクソにやつつけて、目（め）を覚（さ）まさせる方法（ほうほう）。

究竟畢竟（しゅつせひきよう） （出世畢竟）

因果（いんが）をこえた究極（きゅうごく）的な真理（しんり）そのものである仏性（ぶつじょう）をいう。

虚（きょ） （こ）

この言葉（ことば）には「嘘（うそ）」という意味（い）もあり「そこにはないと思（おも）える」ことです。

行住座臥（ぎようじゅうざが）

「あるく、とどまる、すわる、ふすなり」「これを四威儀（しゐぎ）という。また、いつも、つねにという意（い）にも用（もち）いる。

行処（ぎやうしよ）

自分（じぶん）の身（み）の振舞（ふるま）いについての根本（こんぽん）的な心得（こころえ）です。

共生極樂成仏道（きやうせいぎらくぜんぶつどう） （共に極樂に生まれて仏道を成ぜん）

一緒（いっしょ）に極樂（きよくらく）に生まれて、成仏（じやうぶつ）しよう。

弥陀の本願によるが故に、極楽へは念仏に励めば迎えて頂ける。
それを願って念仏に励み、毎日を送る努力を惜しまない。

行体

衆生往生の因となる行そのものこと。

経道滅尽

末法が一万年つづいた後、自力成仏の道を説いた聖道門の經典がすべてこの世界から消え失せることをいう。

行不退

念仏の行をはげむことによつて、その功德により淨土往生が決定すると信すること。

教菩薩法

釈尊は、「あらゆる衆生は平等に仏性をもっている」という偉大なお見透しにより（平等大慧をもつて）人のために尽くす行いこそ仏の境界に達する道であるという教え。

きようまん
橋慢

自分(じぶん)はえらい、よく悟(さと)っている、行(い)いにもまちがいはないというおごりたかぶつた心(こころ)。

く
苦

人生(じんせい)は苦(く)の世界(せかい)であること。(人生(じんせい)一切(いっさい)苦(く))

くあんらくぎよう
口安楽行

第一(だいいち)に、人(ひと)のあやまちや、経典(きょうてん)のアラ探(さが)しなどをして、人(ひと)に語(かた)ってはならない。

第二(だいに)に、他(た)の教(おし)えを説(と)く人(ひと)を、見下(みくだ)すような言葉(ことば)を吐(は)いてはいけない。

第三(だいに)に、他(た)人(にん)のよしあし、長所(ちやうしょ)・欠点(けってん)などをあげて批判(ひはん)するようなことはいけない。

小乗(しょうじよう)の人(ひと)であつても、その名(な)をさしてあれこれと批判(ひはん)してはいけない。

第四(だいよん)に、あの人(ひと)は好き(す)きだ、きらいだ、というようなことをいつてはならない。

こうして、いつも寛容(かんよう)な、おだやかな気持(きもち)を持(も)つていれば、教(おし)えを聞(き)く人(ひと)にもその気持(きもち)が移(うつ)つて、自然(しぜん)と心(こころ)がおだやかになつてくるから、教(おし)えがその人(ひと)の心(こころ)に、スツとはいつていくのである。

空くう

もし難むずかしい質問しつもんをしてくる人があつたら、小乗しょうじょうの教えおしによつて答こたえず、ただ大乘だいじょうの教えおしによつて説といてあげ、最高さいこうの智慧ちえを悟さとらせるように導みちびかねばならない。――これが口安樂行くあんらくぎょうです。

・「あらゆるものには差別さべつがあるように見えるけれども、その差別さべつをこえたむこうにある平等びやうどうの姿すがたを見なければならぬということ」。

・根本こんぽんにある平等びやうどうの相すがた。

・すべてのものの仏性ぶつじやうの平等びやうどう。

・こだわりのない智慧ちえで眞実しんじつを見えるということです。

空即是色くうそくぜしき

・あらゆる「物質ぶつしつ」も、「心こころ」も「できごと」も、すべて「空くう」によつてできているから、「空くう」が即ち「色しき」なのです。

・「空くう」というのは、「なんにも無い」というものではありません、「平等びやうどう」という意味いです。

・「色しき」というのは「現象げんじやう」ということとです。

俱会一処くえいつしよ

「供に仏の世界にまいました」という意味。

久遠実成くおんじつじよう

久遠劫の過去世において実に正覚を成就し仏となつてゐること。

一般に釈尊について、そのさとの内容つまり法が常住永遠であることに、もとづいていわれるが、これに準じて阿弥陀仏も久遠実成の古仏、久遠実成阿弥陀といわれる。

すなわち經典には十劫の昔に成仏されたとあるが、実は久遠の昔からすでに成仏せられていた古仏であるといふこと。

弘願真宗ぐがんしんしゆう

本願念仏を説き顯した真実の教え。

究竟願くきようがん

どんな困難にもくじけることなく必ず成就する願。

恭敬くぎようの心しん

つつしみうやまう心こころ。

すなわち他力たうりきの信心しんじんのこと。

俱共くぐ彈指たんじ

「俱共ともに彈指たんじしたもう」とあります。

これはインドの習慣しゆかんによることで、日本人にほんじんには奇異きいに感じられるかもしれませんが、人さし指ひとゆびとおや指ゆびとで円まるをつくつて、それをボンと弾はじくことを彈指たんじというのです。

これにはどういう意味いみがあるかといいますと、「承知しょうちしました」とか「たしかに約束やくそくします」といつて請合うけあうしるしです。

口決くけつ相承そうじよう

口伝くでんによつて法門ほうもんを受け継つぐこと。

九字くじ名号みょうごう

阿弥陀仏あみだぶつの別号べつごうを「南無不可思議光如来なむふかしぎこうにょらい」という。

「南無阿彌陀仏」といえば六字名号になる。

愚者ぐしやさんに三人さんにんに智者ちしやいちにん一人

愚者ぐしやでも三人さんにんあつまれば智者ちしやいちにん一人にあたるという意。

屈請くつじよう

(僧侶などを)請こい招まねくこと。

功德くどく

・信仰しんぎうによつて心境しんきやうが変かわり、心境しんきやうが變かわることによつて人生じんせいが變かわる」ことを「功德くどく」というのです。
・功德くどくというものは、たんに心こころの上にだけ現あらわれるのではなく、肉体にくたいの上にも、物質生活ぶつしつせいかつの上にも現あらわれてくるものです。

人間にんげんの心こころも、肉体にくたいも、そしてそのまわりに集あつまつてくる物質ぶつしつも、おなじ一種いっしゆの「空くう(エネルギー)」からできているからには、心こころが變かわれば肉体にくたいも變かわり、まわりに集あつまつてくる物質ぶつしつも變かわつてくるのは理りの当然とうぜんであつて、なんの不思議ふしぎもありません。

功德藏くどくぞう

あらゆる功德をおさめ、たくわえられている仏の意。

供養くよう

供養とは、仏に帰依し、感謝する心を表す行動。

仮け

この世のあらゆるものごとがわれわれの五官に感じられたり、心に考えられるときは、すべて、異なつた相をしているように見えます。その表面に現れた差別の相。

罣礙けいげ

「罣」は自然界のさしさわりのこと。

「礙」はむしろ人間界のさしさわり、合せて、世の中のさまざまなさしさわり。

解説げせつ

説法せっぽう

懈怠げだいい

自分の進むべき本当の道に一生懸命にならず、怠けたり、ほかのつまらぬことにうちこんだりすること

解脱げだつ

執着しゆじやくの業ぎようから離れ、輪廻りんねのくるしみから開放かいほうされること。

解脱堅固時げだつけんこうとき

この堅固けんこというのは、「たしかにまちがない」という意味で、解脱堅固時げだつけんこうときというのは、人々が釈尊しやくそんの教おしえを実行じこうして、煩惱ぼんのうの苦しみから解脱げだつすることが確かにまちがない時代じだいということです。

解脱相げだつそう

心こころがものごとの変化へんかに左右さゆうされなくなった状態じょうたいです。

それは、ものごとを平等びやうびように見ることができするために、甲こうが消えて乙おつが現れても、心が動じないのです。

解脫幢相の靈服

袈裟の異名。

袈裟は、解脫の世界に至る標識であるという意味からいう。幢相とは仏塔に揚げる幢に似ているところからいったもの。

決跏趺坐

足を組んですわる事（両のくびすをももの上に置座法）。
禪定を修める時の姿勢で、足を組んで座る座法の一つ。

結集

釈尊が入滅されてから四ヶ月目に、五百人の高弟たちが王舎城に集まって、自分たちの聞いた釈尊の教えを確かめあい、これこそ正しい釈尊のお言葉であるということがはつきりしてから、あらためてそれをしつかり記憶する努力をしました。
こういう会議を結集といいます。

血脈相承

師資相承。
ししそじよう

師から代々正しく伝えて来たことを、身体しんたいの血脈けつみやくが相連あいつらなつて絶えないことに喩たとえる。

慳けん

自分じぶんのもっている物を惜おしむ心こころ。

兼行六度
けんぎょうろくど

布施・持戒・忍辱・精進・一心（禅定）・智慧（六波羅密）という六波羅密をできるかぎり身に行つていくならば、その徳は最もすぐれたものであつて、虚空が東西南北・四維（南東・南西・北東・北西）・上下と無限に広がっているように、その功德も無限であつて、まづすぐに最高の智慧に達することができよう、これが「兼行六度」の段階です。

眼根の罪
げんこん つみ

「わたくしはいままで、迷いのゆえにものごとの見かたを誤り、ものごとを見るたびに重い罪を重ねてまいりましたので、その罪が心を蔽い、心を汚し、諸法の実相を見ることができません。願わくは仏さまの大慈をもつて、このようなわたくしをあわれみお救いくださいませ。」

また普賢菩薩は教えの船に乗つて一切の人びとを悟りの彼岸に渡らせてくださるお方です。

どうぞ、わたくしが過去のあやまちを懺悔しますのに、お力をお添えくださいませ」こう三度唱え、全身全霊を投出して大乘の教えを正しく思いかえし、そして、けつして忘れないようにする——これが「眼根の罪」を懺悔する法であるということです。

現生護念増上縁

この世にてまことの信ある人をまもりたまふと申すみことなり、「増上縁」はすぐれたる強縁となり。

現世利益

現世（現実社会）（この世）での御利益。

賢善精進

かしこく、善く、つとめはげむこと。

正しい行いの義。

親鸞聖人は「賢善精進の相」を「賢者や善人らしくつとめ励むすがた」とされ凡夫の内心は虚仮であるにもかかわらず外面に賢善精進の相をかざることをいましめられている。

還相回向げんそうえこう

浄土じやうどから人間にんげんの世界せかいへ還かえる。

※還相回向げんそうえこうと往相回向おうそうえこうの二種類しゆるいによつて浄土じやうどへ往いく往相回向おうそうえこうが現実逃避げんじつとうひでなく、またこの世界せかいに還かえる還相回向げんそうえこうが現実妥協げんじつたきやうでないことを明らかにしました、すなわち、二種の回向えこうによつて、南無阿弥陀仏なむあみだぶつの教おしえが自己満足じこまんぞくの救いすくでなく、いかなる状況じやうきやうの中なかにあつても生き生きと生きていける本當ほんとうの人間にんげんになる教おしえであると示しめしました。

それで『正像末和讃しょうざうまつわさん』に、「もしも往相おうざう・還相げんそうの二種しゆの回向えこうにあう機会きかいにめぐまれない境遇きやうぐうに生まれたるらば、生死流転せいしりうてんの果はてしない苦海くかいに沈しずんでいるなげきを、どうすることができたであらうか」と如来にやらいの回向えこうによつてのみ、この苦海くかいを生き届つくことができると言いいました。

虚こ

「そこにはないと思おもえる」ことです。

五陰魔ごいんま

人間存在にんげんそんざいを構成こうせいしている色しき(身体しんたい)、受じゆ(感受作用かんじゆきやう)、想そう(表象作用ひやうしやうさやう)、行ぎやう(意志等いしとうの心作用しんさやう)、識しき(認識作用にんしきさやう)

の五つは仏道修行のさまたげとなるから五陰魔という。

業ごう

「業」というのは、簡単にいえば、「行為」ということです。

我々のなすすべての行いが「業」なのです。

行為があれば、必ずその結果というものがあります。

私たちの、現在の瞬間におけるありかたというものは、すべて過去において自分がやってきたこと（業の結果）です。

広こう為いた他た説せつ

いよいよ進んで広く仏の教えを聞き、それを心に植えつけて忘れず、經典を書写するというような努力を実行するのです。

しかも自分だけでなく、人びともそれをすすめる実行させるのです。すなわち、広く他の為に説く「広為他説」の段階です。

業ごう因いん

生死の苦果をまねく因となる行為。

業縁

業の因縁のことで、善悪の行為が苦楽の果を招く因縁となること。

業果法然

如来のなす行為とその行為の結果は、すべてありのままなる自然の道理になつてゐること。

光顔巍巍

顔がおおそかに輝いてゐること。

香光莊嚴

「念仏は智慧なり」。

念仏者は、阿弥陀如来よりたまわつた智慧の香りと光によつて、その人生が美しく莊嚴されていくという。

高貢こうこうのころ

おごるころなり。

行樹ぎょうじゆ

並木なみき

業障ごうじやう

往生おつじやうをさまたげる悪業あくごう。

広大異門こうだいいもん

広大無辺こうだいむへんな仏法ぶつぽうの徳とくを實現じつげんし、他に比類ひるいなき特異とくいな法門ほうもんを成就じやうじゆした安樂淨土あんらくじやうどのこと。

廣大勝解者こうだいしょうげいしや

広大な勝れた法ほうをよく領解りやうげした智慧ちゑの人の意いで、他力信心たうきしんじんの人ひとをいう。

廣大智こうだいち

広く一切を知る智慧。

光明・名号・因縁を示す

阿弥陀仏が撰取の光明を縁とし、名号を因として、一切衆生をすくわれること。

光明智相

光明の本質は智慧であり、智慧の姿は光明であることを言つたもの。
智慧を本質とする光明が十方を照して衆生の迷いを除くこと。

五蘊

人間や人間をとりまく世界を構成している五つの力作用のことです。

「蘊」はあつまりという意味です。

1. 色蘊——目に見えるものの世界のことです。

赤とか白の色を「顕色」、丸とか四角の形を「形色」、両方合せたものが「色蘊」の世界です。

2. 受蘊——私たちがものを見た時に、「ああ、きれいだな」と受け止める働きがあります。

3. 想蘊そうじゆん — これを「受」じゆという作用さよう。
受け止めるとわたしたちは、それを頭あたまの中なかに伝達でんたつします。
4. 行蘊ぎやうじゆん — 「実行する力」
自分じぶんは今いまこうしているなという認識作用にんしきさようが起きますから、これを「識蘊」しきじゆんといふのです。
5. 識蘊しきじゆん —

五蘊皆空ごじゆんかいくう

人間にんげんが生いきているうちは五蘊ごじゆんの働はたらきがあるが、死しねば消きえてなくなつてしまふ、形かたちあるものは必かならず滅めつする
という思想しそつ。

五戒ごかい

- 不殺生ふせつじやう — 生きものを殺ころさないこと。
- 不偷盜ふちゆうたう — 盗ぬすまないこと。
- 不邪淫ふじやいん — 邪淫じやいんを行おこなないこと。
- 不妄語ふもうご — 嘘うそを言いわないこと。

不飲酒ふおんじゆ

酒を飲まないこと。

虚空藏菩薩こくぞうぼさつ

虚空藏とは大空のように、広大無辺の福德・知恵を蔵するという意味です。

『大集経虚空藏品』や『虚空藏菩薩经』には、密教の教主である大日如来の働きのうち、虚空と蔵の特性をもつ菩薩で何ものにも打ち破られない力と、人びとに利益や安樂を与える菩薩と説かれています。

インドでは、虚空の母胎蔵という意味を「アーカシャガルバ」といったので、それを訳して虚空蔵としたのです。

密教の仏さままで、金剛宝とか金剛蔵ともいいます。

『大日経疏』には「虚空は破壊すべからず、一切のものはこれに勝つことができない。蔵とは大宝で自在にこれを取り、貧乏を受けざらしむ」とあります。

だから、福と智の二徳を司る菩薩で胎蔵界曼荼羅図では虚空蔵院として描かれています。

極楽は常住の国ごくらくはじようじゆのくに

極楽浄土は永遠に変わらない真実の世界ということ。

虚^こ仮^け

むなしくかざるなり。

五^ご劫^{こう}思^し惟^{ゆい}

阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}が因^{いん}位^にの法^{ほう}蔵^{ぞう}菩^ぼ薩^{さつ}のとき、世^せ自^じ在^{ざい}王^{おう}仏^{ぶつ}のみもとで一切^{いっさい}の衆^{しゆ}生^{じやう}を平^び等^{とう}に救^{すく}うために、五^ご劫^{こう}といふ長い時^じ間^{かん}をかけて思^し惟^{ゆい}をめぐらせ、往^{おう}生^{じやう}の行^{ぎやう}法^{ぽう}を選^{せん}択^{たく}されたことをいう。

己^こ事^じ

たとえば、失^{しつ}恋^{れん}や事^じ業^{ぎやう}の失^{しつ}敗^{ぱい}や家^か庭^{てい}の不和^{ふわ}などにうちひしがれたり、いらだたりして、心^{こころ}が真^ま理^りのレールを踏^ふみ外^{はず}し、生^{せい}命^{めい}力^{りき}が調^{ちやう}和^わをうしなっている状^{じやう}態^{たい}にあるとしましょう。

そういうときに、仏^{ほとけ}の教^{おし}えによつてほんとうの心^{こころ}の持^もちかたを悟^{さと}ることができれば、心^{こころ}も生^{せい}命^{めい}力^{りき}も調^{ちやう}和^わを得^えて、正^{ただ}しく、生^いき生^いきと動^{うご}き出^だしてくるのです。

これが「順^{じゆん}」のあらわれです。

すなわち、救^{すく}いがそのまま救^{すく}いの形^{かたち}として現^{あらわ}れるのです。

これを「己^こ事^じ」というのです。

五種法師ごしゅほつし

受持・誦・誦・解説・書写じゅじ・どく・じゆ・げせつ・しよしゃ

五焼ごしょう

五惡をなすことにより、来世において受ける果報。
来世の益たる渡世・長寿・泥洹にたいする語。

五常ごじやう

仁、義、礼、智、信。じんぎ・れい・ち・しん

五正行ごしやうぎやう

誦誦・觀察・禮拜・称名・讚嘆供養どくじゆ・かんさつ・れいはい・しやうみやう・さんだんくやう

五障三従ごしやうさんしやう

女性に加えられた五種のさわりと三種の忍従。じよせい・くわ・ごしゆ・さんしゆ・にんじゆう

女性は梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王、仏身になれないことを五障といい、三従とは幼いときは父（親）

に從い、嫁しては夫に從い老いては息子に從うもので、女性は從屬的地位にあり、指導者にはなれないと規定したことをいう。

五濁

1. 劫濁

時代が長くたつたために起こってくる悪です。

例えば、世の中も同じ状態が長くつづく動脈硬化を起こしているいろいろな弊害が起こるようなものです。

2. 煩惱濁

煩惱(迷い)のために人間みんながつまらない行いをするようになること。

犯罪の横行はこのゆえです。

3. 衆生濁

人びとの表面の性質がちがうところから起こってくる争いです。

もともとはひとつの生命で貫かれているということを知らず、表面の相違にとらわれて、それぞれが自我を主張するために、対立が起こり家庭の中や社会が不和になる状態です。

4. 見濁

ものの見方がそれぞれちがうために起こる世の中の乱れです。

みんな自己本位の狭いもののみかたをするためにくいちがいが起こってくるのであって、みんなが仏の教えのような正しいもののみかたをするようになれば自然と

5. 命濁

争いのない平和な世界ができるはずで

人間の命が短くなるために人びとの考えることなすが、目前の利益や、すぐ

効果の現れるようなことばかりを追って、コセコセしたものになり、そのために世

の中にみにくいゴタゴタが絶えずゆったりしたところのない状態です。

これも、みんなが人間の永遠の生命ということに目を覚ましさえすれば、必ず救わ

れることなのです。

己身

「己れの身」すなわち仏の本体ということで本仏を指しています。

己身の弥陀唯心の浄土

阿弥陀仏も極楽浄土も共に、自己の心身のうちに本具する性徳であるという意で華嚴・天台・禅宗等の

聖土門の説。

五千起去

釈尊の説法時において、五千人もの弟子が一時に法座から立ち去っていつても、釈尊はそれをお止めにな

らなかつたのです。

五祖ごそ

法然上人は、曇鸞大師、導綽禪師、善導大師、懷感禪師、少康法師の五師を五祖と呼ばれた。

五痛ごつう

五惡を犯すことにより、現世において受ける華報。
現世の益たる福德に対する語。

業垢ごつく

悪業煩惱なり。

五天ごてん

- ・ 世天せてん（世間の人王）
- ・ 生天しょうてん（天界の諸天）
- ・ 淨天じょうてん（声聞・緣覺）

・義天ぎてん（菩薩ぼさつ）

・第一義天だいいちぎてん（仏ほとけ）

五徳ごとく

五善ごぜんを修おさめて得えた五いつの功徳くどく。

言葉ことばの力ちから

仏ほとけの教おしえでは、言葉ことばと云いうものを非ひじょう常に尊そんちよう重じゆうしております。

仏教ぶつぎようで、人ひとを導みちびく要諦ようていとして「和顔愛語わがんあいご」すなわち和なごやかな顔かおと愛情あいじようをこめた言葉ことばをあげているのも、その一つの表あらわれです。

妙音菩薩みよおんぼさつというお方かたになぜ「妙音みよおん」という名前なまえがつけられたかということことを深ふかく考かんがえてみると、この「美うつくしい音おと」というのはどうしても「真理しんりのことば」という意味いみでなければならぬことがわかつてきます。

五念門ごねんもん

礼拝らいはい 讃嘆さんたん 作願さがん 観察かんさつ 回向えこう

五無間（五逆）

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身を傷つける、仏弟子の和合を破る、以上の五大惡逆で、無間地獄へ落ちるとされている。

五欲

色・声・香・味・触
財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲

去来対

釈迦は去けと発遣され、阿弥陀如来は「来れ」と招喚されることをいう。

欣求真実

浄土門の眞実をいい、まず、浄土の願うべきことを知らされることによって、穢土の厭うべきことに気づかしめられるからである。

権化

仏・菩薩が衆生を救おうとして仮に人の姿を現したもの。

権化の教

聖道門と淨土門内の方便教である要門、真門のことである。

金剛心

金剛は梵語ヴァジュラの漢訳で、何ものにも破壊されない金剛石のこと。

金光明

「金光明經」のこと。

仏の寿命の無量、善神の護持、正法による統治などが、説かれる。

とくに鎮護国家、除災招福の經典として用いられた。

言語道断

言葉を超えていること。

真理は言葉や文字では表現できないほど奥深いことをいう。

言護念増上縁者

まことの心をえたる人を、この世にて、つねにまもりたまふと申すことばなり。

権実

権とは、一時的なかりそめのでたととして設けたもの。

真実の教え（実教）に入らしめるために一時的に方便として仮に説かれた教え（権教）、実とは、永久不変の究極的な真実のもの。

権者

仏・菩薩が衆生を救うために、この世にあらわれた仮の姿のこと。

根性

教えをうけるものの性質、資質。

欣慕浄土の善根

浄土を願ひ慕わせるための善根。



罪障

往生のさまたげとなる罪。

濟生利物

生あるものを救い利すること。

財施

金銭や物質を布施する事。

齊同不退

浄土に往生すれば、みな一味平等の悟りをひらいて、再び迷界に退転しないことをいう。

西方 さいほう

東は太陽の出る方角で、ものごとの始まる所を示し、反対に西は太陽の沈む方角でものごとの納る所を示しているのです。

死んでから西方極樂浄土へ行くと言うのも、その思想によるものです。

三惡道 さんあくどう (苦海 くかい)

地獄・餓鬼・畜生

三緣 さんえん

阿弥陀仏が念仏の衆生を撰取する三種の深いかかわりのこと。

1. 親緣 しんえん

衆生が口で仏名を称え、身で仏を禮拜し、意で仏を念ずるとき、これらを仏は聞き、見、知って衆生と仏とは互いに憶念し合うという。

密接不離の關係にあること。

2. 近緣 こんえん

衆生が仏を見たいと願えば目前にあらわれるという關係にあること。

3. 増上緣 ぞうじょうえん

衆生が名号を称えれば多劫の罪を除き、命の終わるときには仏は聖衆とともに来迎し

て、罪業の繫縛に障碍されず往生させること。

僧伽

僧というのは僧伽の略であり、サンガというのは、梵語で「密接な結合」という意味です、釈尊は、そのお弟子たち、すなわち同じ仏の道を歩む仲間の集団に、この僧伽という名前をつけられたのです。

三界

「三界」というのは、いろいろな解釈のしかたがありますが、普通の解釈に従えば、人間の住んでいる世界（目に見える世界と目に見えぬ世界をひつくるめて）を三つに分け、欲界・色界・無色界とした考えかたです。

欲界——五欲に満ちたわれわれの日常生活の世界です。

色界——心の中で考えられる世界ですが、しかしそれは、ある形をもって考えられる世界です。普通われわれが心で考えるいろいろなものことです。

無色界——形もなにもない、純粋に心の中だけの世界であって、座禪その他の行によつて精神を統一すれば、そういう世界に達せられるとされたものです。

三觀さんかん仏乘ぶつじょうの理り

空くう・仮け・中ちゆうの三種さんしゆの觀法かんぽうによつて、生きとし生けるすべてのものがさとりをひらくとする教おしえ。

三祇さんぎ百大劫ひやくだいこつ

菩薩ぼさつが成仏じやうぶつするまでに經過けいごする長い時間じかん。

三阿僧祇劫さんあそうぎこつにわたつて六度の行ぎやうを修め、さらに百劫ひゃくこつの間、相好さうごうを感得かんとくするための福業ふくぎやうを修めて成仏じやうぶつするといふ。

阿僧祇あそうぎは無数むすう漢訳かんやくする。

三經さんぎやう

大經だいきやう・觀經かんぎやう・小經しやうぎやう

三經一論さんぎやういつろん

「大經」・「觀經」・「小經」の淨土三部經じやうどさんぶぎやうと天親菩薩てんじんぼさつの「淨土論」のこと。

懺悔さんげ

二段階に分れ、第一段階は、普通一般にいう懺悔で、自分の過去における心や行いの過ちを告白することです。

第二段階は、自分の仏性を磨きあげる行であるといつていいでしょう。

三解脱門

解脱をつる三種の方法。

1. 空解脱門——一切の存在は空であると観ずる。
2. 無相解脱門——一切が空であるから、差別の相はないと観ずる。
3. 無願解脱門——願求すべき何ものもないと観ずる。

三業

身・口・意のはたらき。

身に行う身業、口に言う口業（語業ともいう）、心に思う意業（思業ともいう）。

三種の菩提

声聞・縁覚・菩薩のさとり。

三障 さんしょう

悟りの道をさまたげ善心を害する三種。

1. 煩惱障 ぼんのうしょう 貪欲・瞋恚・愚痴等の惑

2. 業障 ごうしょう 五逆・十惡等の身・口・意の三業に惡業のみをなす障り。

3. 報障 ほうしょう 惡業の果報として受ける、地獄・餓鬼・畜生等の苦しみの報い。あわせて惑・業・苦という。

三心 さんしん

至心・信樂・欲生

三塗の巢守 さんず すもり

三惡道の古巢に取り残され、迷界にとどまるもの。

三世間 さんせけん

五陰世間——われわれ個人の心と心がおたがいに影響をあたえあっている関係の世間、いわばせまい

意味の生活環境です。

衆生世間

衆生がいつしよにあつまつて生活している社会(普通にいう社会や国家と考えるとよい)。

国土世間

その社会や国家がたぐさんあつて、それらが仲良くしたり、争ったりしている。世間(普通に言う「世界」とかんがえてよい)。

三千の法門

一切の法門という意。

三尊(中尊と両脇侍のこと)

釈迦三尊は文殊・普賢の二菩薩

薬師三尊は日光・月光の二菩薩

阿弥陀三尊は観音・勢至の二菩薩

三朝浄土の宗師

インド・中国・日本にあらわれて浄土真宗を伝えられた七高僧。

三毒 さんどく
(三障) さんしょう

貪 とん
むさぼりの心。

瞋 じん
怒りの心。

痴 ち
愚かな心、真理に対する無知。

三忍 さんんにん

信 しん・喜 き・悟 ご

・信忍 しんにん
すなわちこれ信心成就のすがたなり。

・喜忍 きにん
信心歡喜の得益をあらはすところなり。

・悟忍 ごにん
仏智をさところなり。

三念処 さんねんじょ

仏の衆生に対する態度を次の三つに分けて示されたものです。

・初念処 しよねんじょ
衆生が仏をたたえても、たたえられたことを喜びとされないで、たたえた衆生の心を喜んでくだされるのです、これを初念処といいます。

・二念処 にねんじょ
仏は、仏をののしったり、のろったりする人があっても、ご自身のためには、すこし

も悲しんだり怒ったりなならない。

そんなことをする人の心を、かわいそうだと深くあわれみ、悲しまれます。

これを二念処といいます。

・三念処

衆生の中には、仏の教えに帰依した人としな人とはありますが、仏はその二種類の人に対して分けへだてをなさらない、平等に慈悲をおかけになつてくださる。

なぜならば、すべて平等に仏性をもっているからです。

こういう一視同仁のお心をもつて衆生をござんになつておられることを三念処といいます。

三輩の文

第十九願成就の文

三福

1. 「観経」に説かれた散善の行三種に分類したもの、

世福(世俗の善)——父母に孝行を尽くし師長(師や先輩)によく仕え、慈悲心もち、善行を修めること。

2. 戒福かいふく(小乗しょうじょうの善ぜん)

—— 仏ぶつ・法ほう・僧そうの三宝さんぼうに帰依きえしすべての戒かいを守まもつて威儀いぎを正ただすこと。

3. 行福ぎょうふく(大乘だいじょうの善ぜん)

—— 菩提心ぼだいしんをおこし、大乘經典だいじょうきょうてんを讀誦どくじゆして淨土往生じやうどうじやうを願ねがうこと。

さんぶさんしん
三不三信

三不心さんふしんと三信さんしんのこと。

- ・ 三不心さんふしんとは信心しんじんが淳あつからず、一いつならず、相續そうぞくせずをいう。
- ・ 三信さんしんとは淳心じゆんしん・一心いつしん・相續心そうぞくしんという。

さんぶつぼだいそん
三仏菩提尊

法身ほうしん・報身ほうしん・化身けしん

さんぶつぼだい
三仏菩提の願船

法ほう・報おう・応おうの三身さんしんの徳とくを全まうして、衆生しゆじやうを救すくう本願ほんがんを船ふねに喩たとえる。

さんぼう
三宝

・ 仏ぶつ・法ほう・僧そう

さんほういん
三法印

諸行無常
しよこうむじょう

諸法無我
しよほうむが

涅槃寂静
ねはんじやくじょう

さんほうにん
三法忍

1. 音響忍
おんこうにん

2. 柔順忍
じゅうじゆにん

3. 無生法忍
むじょうほうにん

さんまい
三昧

ひとつのよい考えに精神が統一してわき道へそれることがないこと。

さんまいほつとく
三昧発得の人師

ぜんどうだいし
善導大師のこと。

三密行業 さんみつぎようごう

身口意の三密加持の實踐法。
しんくいいさんみつかけじっせんぽう

三明 さんみよう

宿命通・天眼通・漏尽通
しゆくめいつうてんがんつうろじんつう

散乱増 さんらんぞう

心をかきみだす煩惱が強いこと。
こころををかきみだすぼんのうがつよ

事 じ

「信仰」と「實行」でなくてはいけないという境地。
しんこうとじっぎつでなくてはいけないというきようち

止惡行善 しあくぎようぜん

惡を止め善を行う。
あくとぜんをおこな

四威儀し い い き

四種の威儀の意。

行ぎやう（歩くこと）・住じゆう（とどまること）・坐ざ（すわること）・臥が（ふせること）の四つをいう。

持戒じ かい

仏ほとけのいろいろな戒めをしつかり守らなければならぬという心。

持戒持律じ かい じ りつ

戒律かいりつを守つて犯おかさないこと。

止観し かん

止しは梵語ぼんごシャマタの漢訳、観かんは梵語ぼんごヴィパシユヤナーの漢訳、もろもろのおもいを止めて心をひとつの対象に集中し（止）、それによつてたゞしい智慧をおこして対象を観る（観）ことをいう。

此岸し がん

こちらの煩惱ぼんのうの岸きし。

思議しぎ

心こころでおしはかること。

言葉ことばでも表現ひょうげんすること。

色即空しきそくくう

あらゆる「物質」ぶつしつも、人間の「心」こころも、世の中の「できごと」も、すべてその大本おおもとは同じであるという意味いみです。

あらゆる「物質」ぶつしつも、「心」こころも、「できごと」も人間の目めで見ればちがったように見えるけれども、その実相じつそうはすべて「平等」びやうどうであるということです。

ギリギリのところまで分解ぶんかいしていつてみると、すべてがエネルギーちから（力）という一種ひというのものになってしま
うから、「平等」びやうどうなのです。

自行じぎよう

人間にんげんにとっては、自分自身じぶんじしんでものごとをやるといふことがいちばん大切なことたいせつです。

自行化他

仏道修行において、自分がよくなることは、ひいては周囲の人々をよくすることです、「自行」即「化他」。自分のためになすことを自行、他人を化益することを化他という。

四教円融の義

釈尊一代の教説を藏・通・別・円の四教に分け、「法華経」には、その一切がまどかにそなわつていゝるとする天台宗の教義。

示教利喜

これは、教えを説く順序をいつてあるので、第一に大体の意味を説き「示」し、その教えにはいつてゆきたいという気持ちで相手の心に動いてきたと見たら、こんどは深い意味を「教」えます。

それも理解できたように思えたら、教えを実行して「利」益を得るように導き、そしてその教えを持ちつづけることが人生の「喜び」となるように仕向けてやる。

これを示教利喜といいます。

教えに導いていく合理的な順序。

仁義礼智信

儒教における人のおこなうべきことを五つの徳として表したもの。

四弘誓願

1. 衆生無辺誓願
衆生の数は無辺であらうとも、かならず一切を救おうと誓願する。(安立行)
2. 煩惱無数誓願
煩惱の数は無数であらうとも、かならずすべてを断ち切ろうと誓願する。(淨行)
3. 法門無尽誓願
仏の教えは無尽であらうとも、かならず学びつくそうと誓願する。(無辺行)
4. 仏道無上誓願
仏の道は無上であらうとも、かならず到達しようと誓願する。(上行)

四苦八苦

人間に均しく与えられた四つの苦しみと、社会生活をするうちに生まれてくる四つの苦しみを合せて「四苦八苦」と呼んでいます。

人間に均しく与えられた四つの苦しみとは「生・老・病・死」であり、人間として生まれた以上、好むと好まざるにかかわらず受ける苦しみです。

そして、人間関係から生まれる四苦とは、次のことをいうのです。

愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦

失恋の心の痛手に苦しむ人なら愛別離苦。

仲の悪い姑と嫁が一緒に暮らさなければならぬ怨憎会苦

自動車や邸宅が欲しいがどうにもならないという求不得苦

肉体や精神が健全であればあるほど悩みも深くなる五陰盛苦。

自見の覚悟

自分ひとりの見解。

異本には「自見の覚悟」とあり、口伝の真心に対し、自己の見解をもって信心を定めることをいう。

地獄

心が怒りで占領されている状態です。

四事

衣服・飲食・臥具・湯薬

四種ししゆの門もん

礼拝れいはい・讃嘆さんたん・作願さがん・觀察かんさつ

自障じしやう自蔽じへい

みずからさとの道をさえぎり、みずから正しい道を蔽いかくすこと。

自障じしやう障他しやうた

みずからの行動をさまたげ、また他人をもさまたげること。

資生ししやうの業ぎやうを説とく

農業・工業・商業というような産業のことについて論じたり、指導したりすることです。

四摂法ししやうぽう(四摂事ししやうじともいう)

1. 布施ふせ——自分の力を分け与えること。
2. 愛語あいご——やさしい言葉。
3. 利他行りたぎやう——人のために尽くすこと(利行りぎやうともいう)

4. 同時——差別をしないこと。

自性唯心

万有はその本性についていえば、ただ心の変現にほかならないもので、自己の心以外に何ものもないとする考え。

この立場より自己の心性を指して直ちに弥陀といい、この心を浄土であると主張する。

時処諸縁

時間と場所とさまざまな条件。

四信五品

「四信」とは、「在世の四信」といい、釈尊が在世中における信仰のありかたを四つの段階に分けて考えたもので、1. 一念信解 2. 略解言趣 3. 広為他說 4. 深信観成
「五品」というのは、「滅後の五品」といい末世における信仰のありかたを五つの段階に分けて考えたものであって、1. 初随喜 2. 読誦 3. 説法 4. 兼行六度 5. 正行六度

治世の語言

政治、經濟、法律というようなことがらについて説くことをいいます。

地藏菩薩

地藏の原語は、大地の意味のクシテイと胎を意味するガルバとの合字のクシテイガルバです、地藏菩薩の由来を説く「地藏菩薩本願經」にむかし、二人の王がいた。

一人の王は、一日も早くさとりを開いて、人びとを助けたいと願いを發す。

一人の王は、みんなを度つてから、自分は仏になろうと發願する。

先の王は一切智成如来という仏になり、後の王は地藏菩薩である。

また「地藏十輪經」には、「釈尊の没後、第二の釈尊と仰がれる弥勒菩薩が、この世に現れる迄、五十六億七千万年という長い間、この世に仏は在りまさない。

この無仏の期間を、仏に代つて世の中を度うのが地藏菩薩である」と説かれています。

自損損他

自分をそこない、他人をそこなうこと。

二諦 じたい

1. 真諦 しんたい — 絶対的な宗教的真理 ぜつたいてき しゅうきょうてきしんり
2. 俗諦 ぞくたい — 世間で認められる相対的な真理 せけん みと そうたいてき しんり

自他一体 じたいいつたい

人の苦しみを見れば、ひとりでに救いの手をさしのべずにはいられなくなるのが、ほんとうの菩薩心です。

自他法界同利益 じたほうかいどうりやく (自他法界は利益を同じくし)

私だけでなく美味しいものは皆で分けあって食べよう。

共にわかち合い、共に幸せになれるように努力することを惜しまない。

七観音 しちかんのん

聖観音・十一面観音・千手観音・不空罽索観音・馬頭観音・如意輪観音・准胝観音

七高僧 しちこうそう

1. 龍樹大士 りゅうじゅだいし
2. 天親菩薩 てんじんぼさつ
3. 曇鸞大師 どんらんだいし
4. 道綽禪師 どうしやくぜんじ
5. 善導大師 ぜんどうだいし
6. 源信和尚 げんしんおしょう
7. 源空上人 (法然上人) げんくうしょうにん ほうねんしょうにん

七支

「不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不惡口・不綺語・不兩舌の七戒をかたどるものとされています。

質直

心に飾り気がなくまっすぐなことです。

七難

火難・水難・風難・剣難・鬼難・獄難・盜難

七福神

福德をもたらす七福神は成立が謎のベールにつつまれた神さま仏さまの多国籍軍です、大黒さまはインドの大黒天と日本神話の大国主命が合体したものですし、恵美須さんもやはり、日本の少彦主命(あるいは蛭子の読み違い)、弁才天はインドの仏教出身、毘沙門天は四天王の一人ですが、もともとの由来は、インドヒンズー教の財宝神、布袋は中国経山寺の住職、福祿寿は一説に琉球人による作で、おめでたい言葉の三文字集合によって出現したとされています。

ここまでで、六神ろくしんなのですが、数が吉数きちすうでないということ、もう一人、寿老人じゆうろうじんを加えて七人しちにんにしてしまつたのです。

どうして七人しちにんなのかというと、「仁王護国般若經」に「七難即滅、七福即生」とあり、あるいは、このへんからうまれてきたのかもしれない。

七宝しちほう

金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・瑪瑙

七菩提分しちぼだいぶん

七覚・七覺分・七覺支・ともいう。

さとりを得るために役立つ七種の行法

1. 念覺支
心にあきらかに憶いとどめてわすれないこと。
2. 摂法覺支
智慧によって、法の真偽かを選択すること。
3. 精進覺支
一心に努力すること。
4. 喜覺支
法を楽しむ喜ぶこと。
5. 輕安覺支
心身が軽やかでやすらかなこと。

6. 定覚支（じやうかくし）
心（こころ）を集中（しゆうちゆう）して乱（みだ）さないこと。

7. 捨覚支（しゃかくし）
心（こころ）の興奮（きうふん）や沈滞（ちんたい）がなく平静（へいせい）なこと。

実（じつ）

「実際に（じつさい）そこにあると見える（み）ことです。」

十界互具（じつかいごぐ）

だれの心（こころ）の中（なか）にも凡夫（ぼんぷ）の六界（ろくかい）と聖者（せいじゃ）の四界（しかい）の十界（じつかい）が具（そな）わっている。

「人間（にんげん）の心（こころ）の中（なか）にもこの十界（じつかい）が具（そな）わっているし「天上（てんじやう）」の人の心（こころ）の中（なか）にもこの十界（じつかい）が具（そな）わっている。

つまり、十界（じつかい）の人の心（こころ）の中（なか）に全部（ぜんぶ）十界（じつかい）が具（そな）わっているというので、これを「十界互具（じつかいごぐ）」といいます。

悉現前（しつげんぜん）

さまざまのめでたきことでも、めのまえにあらはれたまへとねがへとなり。

実証（じつしやう）

わたしは仏法（ぶつぽう）を信じ（しんじ）、行（おこな）うようになってから、このとおり変（かわ）ったんですよ——と、生（い）きた事実（じじつ）を見（み）せ

ること。

実相 じつそう

ほんとうの姿 すがた

人間の命 いのち をはじめとして世 よ の中 なか のすべてのものごとは、まことに千差万別 せんさばんべつ で、生 しょう じたり、消 き えたり、移 うつ り変 かわ ったり、さまざまな状態 じょうたい を現 あらわ しています。

われわれの心 こころ は、その差別 さべつ や変化 へんか によってまどわされ、苦し くる んだり悩 なや んだりするのですが、もし我々 われわれ がものごとの表面 ひょうめん に見 み える差別 さべつ や変化 へんか に目 め もくれず、その奥底 おくそこ にある「差別 さべつ を超越 ちようえつ した真 しん の姿 すがた」「永遠 えいえん に変 かわ ることのない真 しん の姿 すがた」をみとおすこと。

実諦 じつたい

真如実相 しんにょじつそう のこと。

十方 じつぱう

東西南北 とうざいなんぼく と四維 しすい (よすみ) および上下 じょうげ をいう。

十法界

地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界、声聞界、緣覺界、菩薩界、仏界。

四諦（四聖諦）

苦諦くてい——苦くるしみのありのままをみきわめる、

集諦じつてい——苦くが何なにによつて生しょうじたのか、その原因げんいんをつかみ

滅諦めつてい——とらわれの心こころが原因げんいんとわかれれば、その執着心しやくちやくしんをなくすよう努力どりよくする

道諦どうてい——そうすれば実践じっせんの道みちが明らかになる涅槃寂靜ねはんじやくじやうの境地きやうちに至いたるためには、八聖道はつじやうどう（八正道はつじやうどう）を实践じっせんせねばならないという真理しんり。

四顛倒

四よつつの道理だうりに背そむく見解けんかい、すなわち、凡夫ぼんぷが無常むじやう・苦く・無我むが・不淨ふじやうのこの世よを常じやう・樂らく・我が・淨じやうと思おもひ誤あやまること。これを有為うゐの四顛倒しでんどうという。

また、声聞しょうもん・緣覺えんかくのさとの世界せかいが常じやう・樂らく・我が・淨じやうであることを知らないで無常むじやう・苦く・無我むが・不淨ふじやうである

と思おもい誤あやまること。

これを無む為いの四顛倒してんどうという。

四してん天のう王

持国天・増上天・広目天・多聞天のこと。

それぞれ須弥山の東南西北にあつて仏教と仏教徒を守る。

自じ燈明・法燈明ほうとうみょう

釈尊が入滅を前にして阿難にいい残された教えです。

「阿難」よ。

あなた方は、ただ自らを燈明とし、自らをよりどころとするのです。

他人をよりどころとしてはいけません。

また、法を燈明とし、法をよりどころとするのです。

他をよりどころとしてはいけません。

※ここでの「法」は「真理」とか「宇宙の法則」という意味の「法」である。

至徳具足 しとくぐそく

名号にこめられたこの上もない尊い徳が行者の身にそなわること。

此土他土一異 しどたどいちい

仏の絶対的なさとりからすればこの世界とかの浄土の区別はなく一如の世界であるが、我々の相対的な認識からすれば異である。

次如弥勒 しにょみろく

念仏のひとは弥勒のごとくほとけになるべしとなり。

自然 じねん

人為的なものに対して、人為をからず、おのずからそうなっていること。

親鸞聖人は、「おのづからしからしむ」と読み人間のはからいを超えた如来のはからいによる救いをあらわす語とされた、意味上三種に分類される。

1. 業道自然 ごうどうじねん — 善悪の行為によつて因果の法則どおりに結果を生ずること。

2. 願力自然がんりきじねん

他力の意。

阿弥陀仏の本願力を信じ、救いをたのむ行者は、何のはからいをも用いないで本願力によっておのずから浄土に往生せしめられることをいう。

3. 無為自然むいじねん

さとりの世界は有無の分別をはなれ分別による限定を超えた絶対無限の境地であることをいう。

自然清和じねんしやうわ

おのずから発する響きが清らかに調和していること。

自然の智慧じねんちえ

自然というのは「自ら生まれた」という意味で、これは心の中に生じてきた信仰をいうのです。ですから「自然の智慧」というのは、「信仰の智慧」にほかなりません。

地の精気じしやうけ

五穀をみのらせる元気。

慈悲じひ

自分じぶんひとりが智慧ちえをそなえていても、または、自分じぶんひとりが正ただしくても、世よの中全体なかぜんたいはよくならないことがわかります。それで、智慧ちえのおくれた、したがって道みちをふみはずしている人ひとびとを見ると、どうしてもそれを救すくつてあげなければならない気持ち。

四法しほう

1. 自分は仏ぶつさまに生はかされているのだということを、いつも心こころに思おもつていなさい。
2. いつも善よい行おこないをするに心こころがけなさい。
3. いつも正しい信しん仰とう者の仲なか間まにはいつていなさい。
4. いつも人ひとのためにつくすことを考かんがえなさい。

邪偽じやゐの教きょう

仏教ぶつぎょう以外の外道げだうのことをいう。

釈迦しやか如来にょらい

今いまから約やく二千五百年ひゃくごねんほど前まえインドのカピラヴァストウ(現げん在ざいのネパール領りょうタライ地方ちほう)に近ちかいルンビ

二園で釈迦族の王子としてお生まれになった、歴史上実在の仏陀です。

釈迦族出身の如來(仏陀)という意味でこう申上げるのですが、その他にも、釈迦牟尼仏・釈迦牟尼世尊・ゴータマ仏(生家の性・釈尊など多くの尊称でよばれています)。

二十九才の時に出家され、六年間の修行生活の後三十五才で大菩提樹の下で悟りを開かれ、その後四十五年間の伝導生活を行われ、多くの人に、人間の持つ悩み特に生・老・病・死について説法をされました。ちなみに御誕生日は四月八日、悟りを開かれた日は、十二月八日、入滅された日は二月十五日(紀元前四世紀)。

寂靜

不變

寂靜無為の樂

煩惱を滅し尽くした生滅変化のない絶対のさとりの世界。浄土のこと。

折伏

正しい道へ引き入れること。

迹仏 しやくぶつ

この世に實際にお生まれになり、修行の結果、仏の境地に達せられ、八十歳で入滅された釈迦牟尼世尊のことです。

寂滅平等身 じやくめつびようどうしん

煩惱が完全に滅して、一如平等の眞実をさとしたもの。

寂滅無為の理 じやくめつむい いちり

煩惱が消滅したところにあらわれる生滅を超えた一如の理

迹門 しやくもん

「迹仏」の教えということです。

捨家棄欲 しやけきよく

家をすて世間の欲をすてて修行すること。

邪見 じゃけん

まちがった考え かんが

善悪の業報や三世因果などを否定すること ぜんあく ぎょうほう さんぜいんが ひてい

邪定聚 じゃじょうじゆ

わるいことに決定したものの集まり けつてい あつま

娑婆即寂光土 しやばそくじゃつこうど

心がほんとうに宗教的に清まっておれば、外の世界(物)で成り立っている世界がどうかかわっても、精神は常に平和です。楽しいのです。 こころ へいわ たいの しょうきょうてき きよま ぜと せかい もの な たっ てる せかい が どう か わ っ て も、せいしん は じょうに へいわ です。 たのし い の です。

いつも美しい花を見、妙なる音楽を聞いているような状態です。 いつも 美しい はな を み、 たえ なる おんがく を き いて いる よう な じょうたい です。

こういう法悦の境地を、以上のように、極楽ともいうべき世界の有様になぞらえていつてあるわけです こういう ほうえつ ぎょうち を、 いじょう の よう に、 ぎよく と も い う べき せかい の ありさま に なぞら えて い っ て ある わ け です

奢摩他寂靜三昧 しやまたじゃくじょうさんまい

よこしまな乱れ心を離れ、思いを止めて心の寂靜になった状態。 よこしまな みだ れ れ 心 を はな れ、 おも を と めて こ の じゃくじょう に な っ た じょうたい。

邪慢 じゃまん

「邪慢」というのは、邪なことをしていながら、ちつともわるくないと思つてゐる慢心です。
無反省な心です。

沙弥 しゃみ

沙弥とは七歳以上二十歳未満の出家の男子のこと。

住 じゅう

一切のものと(法)を深く知らなければならない。

それが深く解れば、ひとりでに、これからさきどんなものが起こるか(生)もわかつてくる。
また、このものごとはしばらく変らないでつづいていくだろうということ(住)

十悪(十悪業) じゅうあく

殺生、偷盗、邪淫、妄語(うそをつく)、綺語(口先でごまかす)、両舌(二枚舌で人の仲をさく)、悪口、貪欲、瞋恚、愚痴

修因感果 しゅういんかんか

因位の修行を完成し、仏果をうること。

修因感果の道理 しゅういんかんか どうり

自身の修行を因として、それにふさわしい証果を得る。
自業自得の道理。

十三仏 じゅうさんぶつ

十三仏とは不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、葉師、観音、勢至、阿弥陀、阿閼、大日、虚空蔵、です。

十三仏真言 じゅうさんぶつしんごん

不動明王 ノウマク サンマンダ パザラダン カン。

釈迦如来 ノウマク サンマンダ ボダナン バク。

文殊菩薩 オン アラハシヤ ノウ。

普賢菩薩 ふげんぼさつ

オン サンマヤ サトバン。

地藏菩薩 じざうぼさつ

オン カカカ ビサンマエイソワカ。

弥勒菩薩 みろくぼさつ

オン マイタレヤ ソワカ。

薬師如来 やくしにょらい

オン コロコロ センダリマトウギ ソワカ。

観音菩薩 かんのんぼさつ

オン アロリキヤ ソワカ。

勢至菩薩 せいしほさつ

オン サン ザン ザンサクソワカ。

阿弥陀如来 あみだにょらい

オン アミリタテイセイカラ ウン。

阿閼如来 あしやくにょらい

オン アキシユビヤ ウン。

大日如来 だいにちにょらい

オン バザラ ダトバン。

虚空蔵菩薩 こくうぞうぼさつ

オン バザラ アラタンノウオン クラク ソワカ。

宗師 しゅうし

曇鸞大師 どんろうだいし

道綽禪師 だうしやくぜんじ

善導大師 ぜんどうだいし

源信和尚 げんしんわしやう

源空上人 げんくうしやうにん

執心牢固 しゅうしんろうこ

本願 ほんがんをとりたもつ心 しん(信心 しんじん)が、ひとすじで強固 きやうこであること。

十善 じゅうぜん

不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見

十大弟子 じゅうだいし

智慧第一の舍利弗(舍利子)、目犍連、摩訶迦葉、阿那律、須菩提、富樓那、迦旃延、優波離、羅睺羅、阿難陀の十人の仏弟子

宗致 しゅうち

經典に説かれた法義の最も肝要なことから。

十二因縁 じゅうにんねん

小乗の教えの要点的のひとつで、人間(凡夫)が生まれてから死ぬまでの過程と、それが祖先から自分へ、自分から子孫へと輪廻していく状態をつぶさにお説きになり、人生の苦悩はすべて根本の無明(煩惱)が根源であるから、この無明を断ち切ることによって苦悩がなくなり、三世にわたって幸せが得られることをお説きになった大切なおしえです。

十二の段階とは、1. 「無明」 2. 「行」 3. 「識」 4. 「名色」 5. 「六入」(六処または六根ともいう) 6. 「触」 7. 「受」 8. 「愛」 9. 「取」 10. 「有」 11. 「生」 12. 「老死」

十二処

「六根」と「六境」をたししたもの。

十如是

諸々の事物は相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本・末・究竟境
 1. 如是相 2. 如是性 3. 如是体 4. 如是力 5. 如是作 6. 如是因 7. 如是縁
 8. 如是果 9. 如是報 10. 如是本末究竟等

十二類生

生物の生まれ方の分類。

胎生・卵生・湿生・化生の四生に、有色・無色・有想・無想・非有色・非無色・非有想・非無想の八生を加えたもの。

十八界

「十二処」に「六界」を加えたもの。

十力

仏が具えている十種の力。

1. 処非処智力 — 道理・非理を知る力。
2. 業異熟智力 — 業とその果報との因果関係を知る力。
3. 静慮解脱等持等至智力 — 禅定や三昧を知る力。
4. 根上下智力 — 衆生の能力や性質の優劣を知る力。
5. 種種勝解智力 — 衆生の意欲や望みをあきらかに知る力。
6. 種種界智力 — 衆生の本性を知る力。
7. 遍趣行智力 — 衆生の人、天等の諸世界に趣く行の因果を知る力。
8. 宿住随念智力 — 自他の過去世のこと。
9. 死生智力 — 衆生の未来の生死・善悪の世界を知る力。
10. 漏尽智力 — 煩惱を滅した涅槃の境地とそれに到達するための手段を知る力。

十六観想 じゅうろくかんそう

1. 日想観 にちそうかん
2. 水想観 すいそうかん
3. 地想観 ちそうかん
4. 宝樹観 ほうじゆかん
5. 宝地観 ほうちかん
6. 宝楼観 ほうろうかん
7. 華座観 かざかん
8. 像想観 ぞうそうかん
9. 真身観 しんしんかん
10. 観音観 かんのんかん
11. 勢至観 せいじかん
12. 普観 ふかん
13. 雜想観 ざつそうかん
14. 上輩観 じょうはいかん
15. 中輩観 ちゅうはいかん
16. 下輩観 げはいかん

授記 じゆき

仏が「いつかはあなたも仏になれる」という保証をくださること。

宿縁 しゆくえん

阿弥陀仏が遠いはてしない昔から、衆生を救済しようという誓願をたてられた縁のこと。

宿願力 しゆくがんりき

阿弥陀仏が法蔵菩薩といわれた因位いんゐのときに衆生救済のためにおこした本願ほんがんのちから。

宿業 しゆくごう

過去世に造った善悪の業のこと。

これは過去世になした行為が原因となつて、今生の在り方が規定されるという考えにもとづいている。

何十万年も前のことさえもわれわれの心の奥底にはちゃんと残っているのですから、まして何十代前と

か何代前というような近い祖先のなした行いや心のもちかたの影響は、なおさら強く残っているのです

仏教という「宿業」は、そのうえにもっとと深遠なものを含んでいます、すなわち、自分自身の生命

が無限の過去から生きかわり死にかわりしながらつくつてきた「業」も、それに加わるわけです。

宿善

・過去世に積んだ善根。

・獲信のための善き因縁。

・如来の調育のはたらき。

宿福

当相は過去世で積んだ福德善根。

その体は如来の光明のお育て。

宿命 しゆくみよう

過去かこの世よにおける生活せいかつのこと。

衆苦輪 しゆくりん

輪廻りんねのくるしみは車輪しゆりんが回転かいてんし続けるように果はてしなく続つづくことから、車輪しゆりんに喩たとえたもの。

衆生の精氣 しゆくじよう しようけ

生きとし生いけるもののもつ生命せいめい力りきよく。

殊勝の法 しゆくしょう ぽう

とくにすぐれた教おしえ。

阿弥陀如来の本願ほんがんをいう。

衆生無辺誓願度 しゆくじようむへんせいがんど
(衆生しゆくじようは無辺むへんなれども誓ちかつて度どせんことを願ねがう)

苦くるしみ悩なやんでいる人ひとは少すくなくないが、力ちからになつてあげるように尽つくくす努力どりよくを決けつして惜おしまない。

出家 しゅっけ

「出家」ということを、字義のままにとつてはいけなないのであつて、「精神生活の転換」という意味に解釈しなければなりません。

出定 しゅつじよう

禅定より出ること

出離 しゅつり

穢土を出で離るるといふ。
迷いの世界を出て、種々の苦を離れること。

地涌の菩薩 じゆつぼさつ

地べたから湧き出した菩薩というのは、苦しみや悩みの多い現実の生活を経験し、その中で修行を積み、そして世俗の生活をしていながら高い悟りの境地に達した人ひとのことをいふのです。

須臾^{しゆゆ}

短い時間^{みじかじかん}

ほんのわずかな間^{あいだ}

受用^{じゆうよう}

その仏子^{ぶつし}の住^{じゆう}しているところは、仏さまがご自分^{じぶん}の住所^{じゆうしょ}として用^{もち}いてくださるということです、それが「受用^{じゆうよう}」の意味^{いみ}です。

修羅^{しゆら}

何^{なに}ごとも自分^{じぶん}本位^{ほんい}に、自分^{じぶん}の都合^{つごう}のいいように考^{かん}える心^{こころ}です、「修羅^{しゆら}のちまた」というのは、はげしい戦^{せん}場^{じやう}の有様^{ありさま}を形容^{けいよう}することばになっていますが、ほんとうは利己^{りこし}心^{しん}と利己^{りこし}心^{しん}がみにくい争^{あらそ}いをしてる状態^{じやうたい}のことをいうわけです。
これが「修羅^{しゆら}」です。

順化^{じゆんけ}

仏^{ほとけ}の仏性^{ぶつじやう}を発見^{はつけん}し、それを讃歎^{さんたん}することによって、その人^{ひと}に自分^{じぶん}の仏性^{ぶつじやう}を認識^{にんしき}させてやることです。

順次じゆんじの往生おうじやう

現世げんせの命いのちが終おわつて次つぎにただちに浄土じやうどに生まれること。

定じやう

心こころが決定けつぎして動うごかないこと。

調意じやうい

布施行ふせぎやうを修おさめて惜おしみ貪むさぼる心こころを調伏ちやうふくすること。

正因しやういん

浄土じやうどに生まうれて仏ほとけにかならず成なるたねと申もうすなり。

勝縁勝境しやうえんしやうきやう

仏ほとけをもみたてまつり、ひかりをもみ、異香いきやう（めでたき香か、常つねにない妙たえなる香かおり）をもかぎ、善知識ぜんちしきのす
すめにもあはんとおもへとなり。

正憶念

ものを正しく考えることができること。

淨行菩薩

淨行菩薩とは、法華經に出てくる菩薩で、大地より湧きだした地湧の四菩薩のなかの第三番目の菩薩です。末法濁世に出現し法華經を流布すべく仏勅をつけた、れっきとした目的を持つ菩薩さまです。

正行六度

六波羅密を完全に行ずるという意味。

所有広博の言

如来の所有の広大な義理を博く説くこと。

定散心

定善や散善を修して往生を願ひ求める心。
転じて自力心のことをいう。

生死しやうじ

好きなものには欲深く執着し、好きなものが目の前に現れたり消えたりすること。

生死出離しやうじしゆつり

迷いの世界を出で離れること。

正宗分しやうしゆぶん

そのお経の本論であり、中心となる意味をもった部分です。

小乗しやうじやう

釈尊入滅後に釈尊の教えの解釈の違いによつて発生したグループの別名称で主に古い教団の考え方を指示したグループ名で「小乗」と呼ばれた。

清浄光しやうじやうこう

貪欲（むさぼり）の汚れない光。

証誠護念
しやうじやうこねん

念仏ねんぶつの法ほうが真実しんじつであることを証明しやうめいし、念仏ねんぶつの信心しんじんを謗難ぼうなんから護まもる。

正定聚
しやうじやうじむ

淨土じやうど(真実報土しんじつほうど)に往生おうじやうすることが正ただしく定さだまり、必ずかならさとりを開ひらいて仏ほとけに成なることが決定けつていしているとも
がらをいう。

正ただしいことに決定けつていしたものの集あつまり。

証生増上縁
しやうじやうぞうじやうえん

五種増上縁ごしゆぞうじやうえんの一ひと。

諸仏しよぶつが衆生しゆじやうの念仏往生ねんぶつおうじやうを保証ほしやうし証明しやうめいすることをいう。

殊勝智
しやうじやうち

すぐれた智慧ちえ

清淨平等無為法身
しやうじやうびやうどうむにほつしん

煩惱のまじわらない清淨であり、無差別平等の不生不滅の真理そのものである仏身。

小乗仏教
しやうじやうぶつぎやう

出家修行者のみが悟りが到達できるという考え方。

精進
しやうじん

その人の志が固くて、長い年月のあいだ一心に仏法を求めて怠ることがない事。

定相
じやうそう

常住不變の相
じやうじやうふへんさう

勝他
しやうた

他人に勝ろうとする思い、競争心。

聖天^{しやうてん}

お大師^{だいし}さんが唐^{とう}からお連れした仏^{ほとけ}さまは、みんな庶民^{しよみん}的です。

聖天^{しやうてん}も、「お聖天^{しやうてん}さん」と呼^よばれて親^{した}しまれています。

本来^{ほんらい}のお名前^{なまえ}は「大聖^{だいしやう}歡喜^{かんぎ}自在^{じざい}在天^{いてん}」、その聖^{しやう}と天^{てん}をくつつけて「お聖天^{しやうてん}さん」また歡喜^{かんぎ}と天^{てん}をくつつけて「歡喜^{かんぎ}天^{てん}」ともいいます。

そのお姿^{すがた}は、頭^{あたま}は象^{ぞう}で、体^{からだ}は人間^{にんげん}の男女^{だんじよ}が、抱合^{だきあ}つて性交^{せいこう}をしています。
男^{おとこ}は大自在^{だいじざい}在天^{いてん}の化身^{けしん}、女^{おんな}は十一面觀世音^{めんかんぜおん}の化身^{けしん}です。

聖道淨土^{しやうどうじよと}の教^{きやう}

仏教^{ぶつぎやう}全体^{ぜんたい}を指^さす。

聖德太子^{しやうとくたいし}の「十七^{じゆ}条^な憲法^{けんぽう}」第十^{だいじゆ}条^{じやう}

「人^{ひと}みな心^{こころ}あり、心^{こころ}各々^{おの}執^とれることあり。

彼^{かれ}是^{ぜい}なれば我^{われ}は非^ひ。

我^われ是^{ぜい}なれば、かれは非^ひ。

我^われ必^{かなら}ずしも聖^{せい}ならず。
彼^{かれ}必^{かなら}ずしも愚^ぐにあらず。
共^{とも}にこれ凡^{ぼん}夫^ぶなるのみ。」

淨入願心^{じょうにゅうがんしん}

国土莊嚴^{こくどしょうげん}、仏莊嚴^{ぶつしょうげん}、菩薩莊嚴^{ぼさつしょうげん}として示^{しめ}される淨土^{じょうど}の徳^{とく}は、法藏菩薩^{ほうぞうぼさつ}が生^いきとし生^いげるものを救^{すく}いたいと願^{ねが}われた大悲^{だいひ}の心^{こころ}にもとづくものであるから、因^{いん}にかえしていえば阿弥陀仏^{あみだぶつ}の因位^{いんゐ}における願心^{がんしん}におさまるといふこと。

正の觀仏^{しょうのかんぶつ}

1. 眞觀^{しんかん}——淨土^{じょうど}の仏身^{ぶつしん}と仏土^{ぶつど}そのものを觀想^{かんそう}すること。
2. 仮觀^{かりかん}——淨土^{じょうど}を觀想^{かんそう}するためのたてとして、この土^{つち}の日^ひや水^{みず}や仏像^{ぶつぞう}を觀^{かん}すること。

上輩の三人^{じょうはいさんじん}

勸經^{かんきやう}に説^とく上品上生^{じやうほんじやうじやうせい}、上品中生^{じやうほんちやうじやうせい}、上品下生^{じやうほんげじやう}

常波羅密 じょうはらみつ

無常なものへの執着から離れて常住のものをしっかりとつかまえる修行。

浄波羅密 じょうはらみつ

淨らかな心で自他の差別（有相）を捨てきつたところ。

成弁 じょうべん

成就すること。

完成すること。

正法 しやうぽう

「解脱堅固時」と「禪定堅固時」は、仏の教えが正しく守られ、正しく行われていること。

正法の精氣 しやうぽうのしやうけ

仏法僧の三宝のもつ功德力。

常没の衆生 じょうもつ しゅじょう

つねに迷いの世界に沈んでいる衆生。
まよ せかい しず しゅじょう

声聞 しょうもん

声聞とは、仏の教えを耳で聞き、そのきいたことをくりかえしくりかえし習うことによつてある程度の悟
しょうもん ほに おし みみ き りを得た人。
え ひと

いいかえれば学習主義の修行者。
がくしゅうしゆぎ しゆぎようしや

声聞乗 しょうもんじょう

仏は「まず仏の教えを聞いて迷いを去れ」という学習主義。
ほに おし き まよ さ

小欲知足 しょうよくちそく

世間的に欲が少なく足るを知ることです。
せけんてき よく た し

常樂我淨 じょうらくがじょう

涅槃にそなわる四種の徳をあらわす。
ねはん ししゆ とく

諸有輪しゅうりん

迷い^{まよ}の世界^{せかい}をいう。

迷いの存在は果てしなく輪廻転生することから車輪に喩えたもの。

所歸の仏智しよきぶつち

衆生しゅじょうに歸順きじゆんされる仏智ぶつち。

諸行往生

種々の善根を修めて、その功德を因として浄土に生まれること。

しよぎょうむじょう
諸行無常

「諸行」というのは、「この世の中に現れるすべての現象」という意味です。

「**無常**」というのは、「つねでない」すなわち「いつでも同じ状態ではない」ということは、つまり「**変化**する」という意味です、ですから、「**諸行無常**」ということとは、「この世のすべての現象は変化するものである」という意味なのです。

濁世の目足

教と行が五濁悪世の行者の目となり足となること。

書写

経文を写すること、および文書によつて布教すること。

初随喜

ただ、頭だけで「解った」とか「なるほどそうだ」とおもつたのでは、まだ信仰したとはいえませんが。「ああ、ありがたい」という魂の喜びを覺えたとき、はじめて信仰の境地にはいったわけで、初めて随喜の心を起したのでから、これを「初随喜」といいます。

自余の行

念仏以外の行業

諸波羅蜜

六波羅蜜などの菩薩の修行

序分じよぶん

そのお経きやうが、いつ、どこで、どんな程度ていどの人々ひとびとを相手あいてに説とかれたのか、なぜそのお経きやうを説とかねばならなかつたかそしてまた、そのお経きやうにはどんな意味いみのことが説とかれてるかという大要たいようなどが書かかれてある部分ぶぶん。

諸法しよほう

ほんとうの実在じざい

諸法実相しよほうじつそう

一切いっけの存在そんざいの真実しんじつのすがたをいう。

諸法無我しよほうむが

「諸法無我しよほうむが」というのは、「この世よの中なかのすべてのものごとは、必ずかならずほかのものとつながりがあるもので、全然他ぜんたと切り離はなされて孤立こりつしているもの（すなわち我が）はない」ということです。

四楽しじやく

断受楽だんじゆらく、寂静楽じじやくらく、觉知楽かくちらく、不壊楽ふかいらく。

心光 しんこう

大智大悲の仏心をもつて救済する摂取の光明。
だいちだいひ ぶつしん きゆうさい せつしゆ こうみょう

親近処 しんこんしよ

世間の人びととの交際上つつしむべきこと。
せけん せうかい

深正念 じんしやうねん

三昧における寂靜の心境
さんまい じやくじやう しんきやう

信心開發 しんじんかいはつ

他力回向の信心が衆生の心中にはじめてひらきおこること。
たうりきえこう しんじん しゆじやう しんちゆう

真身観 しんしんかん

『観經』に説く十六観法の第9観。
かんきやう と かんぼう だい かん

阿弥陀仏の身相光明を観する法。
あみだぶつ しんそうこうみやう かん ほう

深信観成

仏の教えによつて、心がつねに法悦に満たされておれば、この現実の世界が楽しくて楽しくて仕方ない所に一変するのです。

どこを見ても美しく、たれを見ても菩薩に見えるのです。

すなわち、その人の表面のみにくさを突き抜けた奥の奥にある平等の仏性を見ることができるようになります。これが、信仰者としての最高の境地であつて、

このことを「深信観成」といいます。

真智は無知なり

真智は実智、如実智ともいい、無分別智のこと。

ものの本質のありのままが平等で不二であることをさとする智。

無知とはすべて因縁によつて生じたものは実体がなく空であるから、そこには対象的に知るといふこともないとの意。

神通

如来の本体にそなわっている廣大無辺な「生かす力」がありとあらゆる衆生にはたらきかけるとき、

そのはたらきを妨げるものはまったくなく、まことに自由自在な力を及ぼされるといふこと。

神通如意

思うがままに、なにごとでもできる不思議なはたらき。

進道の資糧

仏道を進むためにたすけとなるもつで。

瞋恚

怒り

瞋恚・増嫉

「おもてに怒り、心に怒り嫉み妬むなり」

真如

絶対的な真理であり、それだけがつねに実在するもの。

真如三昧 しんにょさんまい

虚妄分別をはなれ、ありのままの真実の姿をさとした境地。

真如の門 しんにょもん

「法身のさとりを開く身とうつり入るとまうすなり」第十八願の他力念仏をいう。

心不退 しんふたい

信心が退転しないことで、現生不退のこと。

信不退 しんふたい

阿弥陀仏の本願を信する一念に浄土往生が決定すると信すること。

信謗 しんぼう

信じる者とそしる者。

正定聚の位に定まることをいう。

随縁の雑言

如来によつて選定された行ではなく、その人々の機縁にしたがつて修行する、煩惱のまじつた善行。

随喜

他の人がなした善行をよろこぶこと。

出広長舌

これは、仏さまが非常に大きな舌をお出しになつて、その舌が梵天までとどいたということです。

これはインドの習慣にもとづくことであつて、「昔のインドでは、舌を出すのは、自分のいつたことは暫つて真実である」ということを表す行為でした。

仏さまが無限に広くて長い舌を出されて、それが最上の天界まで達したということは、仏さまのいままでお説きになつた教えがすべて真実であり、永遠に真実であることをしめされたのです。

随自意説ずいじいせつ

仏自身の意にしたがつて説くこと。

随自他意説ずいじたいせつ

自他の意にしたがつて説くこと。

随心供仏ずいしんくぶつ

ここにしたがいて仏へ供養するという。

随他意説ずいたいせつ

仏が相手の素質能力に応じて、その意になつた法を説くこと。

睡眠増すいみんぞう

意識がぼんやりして心身の反応がおこりにくい状態。
心の鈍重なこと、煩惱の一。

是学ぜいがくむがく無学

なを学まなぶべき余地よちを残のこす者ものと、もはや学まなぶべきことのない者もの。

誓願せいがん

誓願せいがんを起おこすというのは、ただ願ねがうだけではありません、それに対たいしてあらゆる努力どりよくをすることです。

誓願せいがん一仏乗

阿弥陀仏あみだぶつの誓願せいがんによつて成就じょうじゆされた南無阿弥陀仏なむあみだぶつは生いきとし生いける者ものを平等びやうどうに成仏じやうぶつせしめる絶对ぜつたい唯一いっの教法きやうぽうであるという意い。

誓願せいがん不思議

阿弥陀仏あみだぶつの誓願せいがんは人間にんげんの思慮しりよふん分別べつぶんや議論ぎろんをこえているので不思議ふしぎという。

施眼せげん

如来にょらいは衆生しゆじやうに智慧ちえの眼めを施ほどこされるから。

世自在王仏
せじざいおうぶつ

世自在王は梵語ローケーシユヴァラ・ラージャの漢訳、世間一切法に自在なることを得、世間を利益するに自在を得た仏という意。

摂化随縁
せつけずいえん

衆生の機縁に従つて教化すること。

摂取不捨
せつしゅふしや

阿弥陀仏が、法蔵菩薩のとき四十八願を立てられた中の、第十八番目の願いをいい、その意味は、生きとし生けるものすべてを摂いとらずには、私(菩薩)は仏にならないと誓つたという。

摂生増上縁
せつしようぞうじょうえん

衆生をおさめとつて浄土に往生しめるすぐれたはたらき。

舌相を出し
ぜつそう いだ

仏の三十二相の二で広長舌相といわれる。

きようせつ しんじつ
教説の真実であることを証明するといふ意味を持つ。

世の八法

り とく さい せんしつ ぎ
利(利得)、衰(損失)、毀(かげでそしること)、誉(かげでほめること)、称(面前でほめること)、譏(面前でそしること)、苦、楽。

選択摂取の白業

じようど う
浄土に生まれゆくために、仏より回向された清浄な行業。
ほとけ みようごう ぎ
仏の名号を指す。

専修正行

ねんぶつ しようぎようしぎう
もつぱら念仏の正行を修する意で、自力を離れてただ念仏をする浄土真宗の宗義をいう。

禅定

- ・いつも静かで、安定した心。
- ・どんなことがおこつても動揺することのない静かに落着いた心。

禅定堅固

心静かに瞑想する修行がよくおこなわれること。

施陀羅尼

さらにすすんで陀羅尼を他へ及ぼす感化力。

善知識

知識というのは知り合いということ、善知識といえは善い友ということになりますがそれには、「友」であると同時に「指導者」という気持ちの含まれたことです。

・よきとも

・巧みな教化者。

・仏教の道理を教え導き、仏道に入らせ、さとりを得させる人。

・また仏道に入らせる縁を結はせる者や共に仏道を励む人をいう。

千輻輪のあなうら

仏ほとけの三十二相さんじふにさうの一ひとつ。

仏ほとけの足あしの裏うらにある、千ちの放射状ほうしやうじやうの模様もよう。

先仏せんぶつ

釈尊しやくそんのご出世しゆつせ以前の過去かこの世よにおけるもろもろの仏ほとけ。

善本徳本ぜんぽんとくほん

「因位いんねを善本ぜんぽんという、果位かゐを徳本とくほんという。」

仏ほとけの因果いんがの徳とくをおさめた名号みごうのこと。

僧そう

僧そうというのは「僧伽さんか」の略りやくであり、サンガというのは梵語ぼんごで「密接みつせつな結合けつごう」という意味いみです。

相応一念そうおういちねん

信しんの一念いちねんが仏智ぶつちに相応そうおうすること。

総願そうがん

どんな人々にも共通な「願」で、仏教徒として「仏の教えを学び、煩惱を断ち切ろうと考えるのはだれにも共通な願いです。

「自分が悟ることによつて、多くの人のためになろう」と考えるのもそうです。

そういう「願」を「総願」というのです。

その「総願」は四つあつて、これを「四弘誓願」といいます。

総合そうごう

全体を大きくまとめて考えてみて、はじめて全体につうずる真理というものが確かめられるのです。

相好莊嚴そうごうしょうげん

仏のすがたも実体的にあるのではなく、それがそのまま色も形もない絶対の真理そのものになつていくこと。

莊嚴畢竟しょうげんひきよう (世間畢竟)

仏果を得るための因行である六波羅蜜。

総持そうじ

・梵語ぼんごダーラニーの漢訳かんやく。

・陀羅尼だらにと音写おんしゃ

・仏ほとけの教おしえの精要せいようをわずかな言語げんごにおさめた章句しょうくのこと。

1. よくすべてをおさめ保たもつて忘わすれない力ちから。

ひとつのことがらを記憶きおくすることによつて、あらゆることがらを連想れんそうして忘わすれない記憶術きおくじゆつ。

2. 万善まんぜん万行まんぎやうを欠かけることなく円まじかに具そなえた名号みやうごうのこと。

3. 智慧ちえのこと。

造時堅固ぞうじけんこ

寺院造築じいんぞうちくが盛さかんに行おこなわれること。

増上縁ぞうじようえん

すぐれた因縁いんねん。

縁えんとなつて果かを引ひかせる強つよいはたらき、また因いんか果かになることをさまたげないこと。

浄土往生を得しめる阿弥陀仏の勝れた力。

増上慢

「増上慢」というのは、すこししか悟っていないのにすっかり悟っているように思い、すこししか知っていないのに大いに知っているように錯覚する慢心です。

雑染堪忍

煩惱にけがされ苦しみに堪え忍ばねばならない娑婆世界。

像法

正法のあとの「多聞堅固時」と「多造塔寺堅固時」は仏法が像の上だけでものこっている時代ですから、この千年を像法の時代といいます。

息災延命

七難をとどめ、いのちを延べたまうなり。

即身成仏そくしんじょうぶつ

この世よでこの身みのままで仏ほとけに成なる。

即身是仏そくしんぜいぶつ

この身みそのまが仏ほとけである。



第一義空だいいちぎくう

究極きうごくの真理しんりである空くう。

虚妄こもうなる凡夫ぼんぷの認識にんしきを離はなれた絶対的境地ぜったいてききやうち。

大会衆だいえしゅう

阿彌陀仏あみだぶつの説法せっぽうの会座えざにあつまっている多くの聖衆おほしやうじゆという意い。

親鸞聖人しんらんしょうにんは念仏者ねんぶつしゃは現生げんせいにありながら、浄土じやうどの眷属けんぞくたらしめられているので、現生正定聚げんせいしょうじやうじゆのことを大会衆だいえしゅうといわれた。

大応供だいおうぐ（大安慰だいあんゐ）

阿弥陀仏あみだぶつの異名いみょう。

衆生しゅじやうに大いなる安らぎとなぐさめを与える徳とくをそなえているという意。

対機説法たいきせつぽう

釈尊しやくそんは対機説法たいきせつぽうといつて相手の機根きこんに応じ、その場合、場合に依おじて、自由自在じゆうじざいに法ほうを説とかれた。

大黒天だいこくてん

昔むかし大黒だいこくさまは大摩尼珠王如来だいまししゆおうにょらいであつたと言いわれています。

しかも、「お金かねが欲しい」という娑婆世界しやばせかいの人々ひとびとの願ねがいを聞きいて、大福德円満自在菩薩だいふくとくえんまんじざいぼさつとなり大黒天だいこくてんに姿すがたを変かえたのだと言いわれています。

では、なぜ大黒だいこくなのかと言いうと、インド名マハー・カーラと言いいます。

マハーは大きい、カーラは黒で大黒だいこくなのです。

インドの象ぞうの神様かみさまともいわれています。

さて、行者姿ぎやうしやすがたになつた大黒だいこくさまは、お釈迦しやかさまの前まえで、「世界せかいのあらゆる貧困ひんこんをなくして、みんなが豊ゆたかに

暮らせるようにしたい」と願いを立て、さらに、「私の名前を唱えたり、木像に彫って部屋に安置するならば、七代にわたってお金の福をさずけましよう」「大黒天円満陀羅尼經」と誓うのです。
また、インドや中国において大黒天は寺院の台所に二、三寸の座像で安置されたことから日本のお寺でも台所の守り神として、祭られてきました。
また、大黒さんのまつられている台所と座敷の間に立てる柱のことを、「大黒柱」というのは、このことからです。

大士

龍樹菩薩、天親菩薩

帝釈天

帝釈天のルーツはインドにあります。それも紀元前千数百年前にもさかのぼれるほどで、帝釈天のインドの名は「インドラ」で因陀羅、天帝釈等と訳されています。稲光りをひからせ雷鳴をとどろかして、豪雨をもたらす雷を神格化したものです。

この帝釈天が仏教にとり入れられると、護法神として崇められました。

だいじやくめつ
大寂滅

一切の法は本来空寂であるという空理。

だいじよう
大乘

小乗という呼称に対して呼ぶグループ名で、積尊入滅後に発生した、仏法の解釈の問題で、年月と共に、ゆがめられ、生き生きした力を失ってゆく仏法を見て、「このままにしておいてはいけないどうしても積尊の本当のお心にかえさなければならぬ」という熱烈な願いが主として在家信者のあいだに起こってきました。そうしてできた新興グループが、大乘仏教の教団です。大乘というのは、「よい乗り物」という意味で、仏の世界に達するためのよい乗り物であるというわけです。

だいじようぶつぎよう
大乘仏教

「他の人々を救済することを前提にしてのみ、自分自身の救済が達成される」という考えであらゆる人を悟りにもたらず教え。言うまでもなく「大乘」とは大きな乗り物の意味。

だいひでんぷけ
大悲伝普化

如来の大悲を万人に伝えること。

大悲の心

人を苦しめたり、生き物を殺したりすることを好むものには、かわいそうだという心を起こさせて、生きものを苦しめたり殺したりしないばかりか、逆に苦しんでいるものを救いたいという心。

多生曠劫

多くの生をうけ、長い時をへだてた無限の時間。

他身

本体が然燈仏とか阿弥陀如来というように、他のある相をとってあらわれた仏のことです。

他心智

六神通の一。他心通ともいう。

他人の心を知る智慧。

多宝証明の往事

説法をする釈尊の前に多宝如来があらわれて、釈尊の説法の眞実なることを証明したという故事。

多聞堅固

仏の教えがよく聞かれ、よく理解されること。

陀羅尼門

大勢の人間を導いて、わるいことを止めさせ、よい行いをすすめていく力。

他力大行の督促

阿弥陀仏の本願の働き。

他力本願

浄土教系の仏教で用いられる言葉で、他力というのは阿弥陀如来が一切の衆生を救いとして浄土に生まれさせないではおかないと誓われた本願のもつ力をいう。

たんにせんねんあみだぶつしゅじょう
但有專念阿弥陀仏衆生

ひとすじにふたごころなく弥陀仏を念じたてまつると申すなり。

だんきん
弾琴の教え

釈尊が守籠那という比丘に説いた教えで「精進にかたよると、心が緊張しすぎて静かではありません。精進が緩やかすぎると、懈怠におもむくのです。」

ですから、平等の精進に住し、諸根の平等を守りなさい。

そして、『中』の相をとるように心がけることです。」

ち
智

仏が一切のものの差別の面も知り分けておられる。すべてのもののちがつている点を見分ける力です。

ち
智慧

正しいものの見方、ものごとのほんとうの姿を見分ける力。

この世の中よなかのすべてのものごとの本質ほんしつをよく見通しみとお、ものごとが起こおつたり、移りかわつたりする理法りほうを正しくただしていることです。

智慧ちえこう

愚痴ぐち（おろか）を除く光ひかり

智願海ちがんかい

阿弥陀仏あみだぶつの広大くうだいにして深遠しんえんな智慧ちえから起こつた本願ほんがんであるから智願ちがんといい、その徳とくを海うみに喩たとえた。

畜生ちくしよう

智慧ちえが全然ぜんぜんない状態じょうたいです。

愚かなことおろかなことです。

ものの理ことわりというものがわからないために、ただもう本能ほんのうの命めいずるとおり、前後ぜんごの考えかんがもなくやりたいことをやる状態じょうたいこれが「畜生ちくしよう」です。

知見波羅密ちけんはらみつ

すべてのものごとのほんとうの姿を見極める力。

智炬ちこ

智慧の灯火ちえともしび

智・慈・行ちじぎよう

智ち
文殊菩薩もんじゆぼさつ

慈じ
弥勒菩薩みろくぼさつ

行ぎよう
普賢菩薩ふげんぼさつ

智者ちしや

人生の意義をほんとうにわかった人。

智分ちぶん

智慧の分斉の智慧のはたらき。

智目・行足 ちもく ぎようそく

さとりをひらくために必要な智慧の目と修行の足。

中諦 ちゆうたい

「空」の見方にも「仮」の見方にもかたよらず、その両方を総合した見方をするのがほんとうに正しいもの
の見方であってこれを「中諦」といいまた「中道」というのも、ほぼ同じことです。

中道 ちゆうどう

中道というのは、「二方にかたよらない」ということです。しかしそれは「右にも左にもかたよらないちよ
うどまん中」という意味ではありません。

釈尊のお説きになった、「中道」は、「ちようどまん中」というような固定したものではないのです。

超日月光 ちようにちげつこう

日や月の光のようにこの世界だけを照らすのではなく、全宇宙を照す光。

通一仏土 つういつぶつど

十方世界には区切りがなくなつて、どこへでも自由自在に行けるようになり（通達無礙）、この宇宙間がすべて一つの仏土のようになってしまふといふこと。

通故

例外のない道理の意。

罪

生命のあたりまえの歩みをとめること、またはあとへもどることをいう。

生命向上の原則からいつて当然なすべきことについて、自分にできるかぎりの努力をしないこと、これが「生命の歩みを止めること」で、これは消極的な「罪」であり、悪であります、まして人を苦しめたり、おとしめたり、人の財産をうばつたり、戦争をしたり、殺しあつたりするようなことは、生命向上の道であつてもどりする行いですから、大きな罪であり、積極的な「罪」であり、「悪」であります。

天眼

「天眼」というのは、理詰めに追究していつて、その物の本質を見分ける見方です。

だから、普通の人に見えないものを見る能力のある人を、むかしは「天眼通」などといったものでした。

天上^{てんじょう}

歓喜^{かんき}の世界^{せかい}です。

しかし、これは仏^{ほとけ}の悟り^{さと}によって得^えたほんとうの喜び^{よろこ}、すなわち変化^{へんか}することのない喜び^{よろこ}では、ありません。肉体^{にくたい}や感情^{かんじ}の喜び^{よろこ}、つまり迷い^{まよ}のうへの喜び^{よろこ}ですから、何かいやなことが起^おこればすぐ地獄道^{じごくどう}や餓鬼道^{がきどう}や修羅道^{しゆらどう}などへまっさかさまに落ち^おる可能性^{かのうせい}のある、ほんの仮^かりの喜び^{よろこ}です。有頂天^{うちようてん}というのはこの状態^{じょうたい}のことです。

天中^{てんちゅう}の天^{てん}

五天^{ごてん}すなわち、世天^{せてん}、生天^{しょうてん}、淨天^{じようてん}、義天^{ぎてん}、第一義天^{だいいちぎてん}

顛倒^{てんとう}

ものごとを逆^{さか}さまに考^{かんが}えて、実相^{じつそう}を見間違^{みまちが}うことです。

凡夫^{ぼんぷ}の四顛倒^{しでんとう}といつて次のものがあります。

1. 常顛倒^{じょうてんとう}——変化^{へんか}するものを変化^{へんか}しないと見る。
2. 樂顛倒^{らくてんとう}——「苦^く」であるものを、一時的現象^{いつじてきげんしぎょう}を見て「楽^{らく}」とかんがえる。

3. 淨顛倒 じやうてんとうがてんとう

不淨なものを表面の姿だけを見て「淨」とかんがえる。

4. 我顛倒 がてんとう

諸法は無我であつて、みんな持ちつ持たれつであるのを自分だけで立つていつて
いるように考える。

天然崇拜 てんねんすうはい

自然物に対して、「恐れ」を感じ、それが「畏れ」とかわり、ついにそのようなものを神として拝むようになったのです。

そのような信仰を「天然崇拜」といいます。

転法輪の因 てんぽうりんいん

釈尊の説法を広めるもと。

同行 どうぎやう

共に念仏の教えを聞き行する人々。

浄土真宗の信者は心を同じくして道を行するものであるから同行という。

等正覚とうしやうがく（諸仏正遍知海しよぶつしやうへんちかい）

正遍知しやうへんちは梵語、サンヤク・サンブツダの漢訳で如来十号の一。

海うみとは仏のあまねくさとられた智慧ちえの広大なことを海に喩えたことば。

正しく完全かんぜんに真理をさとったあらゆる仏陀たちの意。

闘諍堅固とうじやうけんこ

争あらそいが盛んになること。

当生の処とうしやうとこ

未来みらいに生まれるべきところ。

同体の大悲どうたいだいひ

同じ悟りおなの智慧ちえから起こる大悲だいひ。

道平等だうびやうどう

諸仏しよぶつの悟りさとが平等びやうどうで同一どういな一。

同味 どうみ

「法華經」と同時に説かれた「観經」には、同じ醍醐味たる一乗円教がとかれている。

独覚無上 どくがくむじょう

・独り無上を覚る。

読誦 どくじゆ

・經典の文字を見て声を出して読むのを「読」
・文字を見ないで声を出して読むのを「誦」という。

読誦大乘解第一義 どくじゆだいじようげだいいちぎ

大乘の經典を読み、第一義すなわち最高の真理を理解すること。

得生の想 とくしやう おもひ

必ず浄土往生を得られるであろうという想い。

得度 とくど

さとりの世界に渡り入ること。

得道 とくどう

さとり智慧を得ること。

徳本 とくほん

悟りをえるための根本となる善い心。

独無等侶 どくむどうりょう

世にならぶものがないほど尊い方。

抖擞 とそう

心身を悩ます全ての欲望（我利、我欲、煩惱）を振り払い、心を磨いて真の人間道に目覚めるよう精進努力することを行います。

度無所度^{どむしよど}

大菩薩^{だいぼさつ}は、衆生^{しゆじやう}は本来空^{ほんらいくう}なりと悟^{さと}るが、ゆえに済度^{さいど}しても、済度^{さいど}してやったという、とらわれの思^{おも}いが全^{まった}くないこと。

貪^{どん}

人^{ひと}のもっている物^{もの}をむやみに欲^ほしがる心^{こころ}。



内典外典^{ないてんげてん}

仏教^{ぶつぎやう}の典籍^{てんせき}と仏教^{ぶつぎやう}以外の儒教^{じゆぎやう}などの典籍^{てんせき}。

南無^{なむ}

「南無^{なむ}」というのは、梵語^{ぼんご}そのままの音を漢字^{かんじ}であらわしたもので、その意味^{いみ}は「歸命^{きみん}」ということです。「歸命^{きみん}」というのは、全身^{ぜんしん}全靈^{ぜんれい}を投出^{なげだ}して、「お任せします」と「法^{ほふ}」の中^{なか}へ溶けこんでいくことです。そして、その瞬間^{しゆんかん}身^みが震えるほどに感^{かん}ずる「ありがたい」という法悦感^{ほうえつかん}も、この二音^{おん}の中に籠^なめられています。

サンスクリット語の“ナマス”それが変化して“ナモ”となった語を音訳したことは「帰依する」といった意味。

難化能化

教化し難いものを導いて教化する。

難思議往生

第十八願の弘願念仏による真実報土への往生をいう。

難思議とは不可思議という意で「大經」の第十八願の法は因果ともに不可思議であるから難思議という

難思光

悟りの浅い人には想い及ばない光。

難信の法

自力をもつては決して信することができない法門の意で、この經に説かれた念仏往生の教えを指す。

この教えは、世間の道理を超越しているから、世間の常識や自力心では、はなはだ信じ難い法ということ。

そのことはまたこの法の尊高をあらわしている。

難値難見

あつことも見ることも難しい。

二教

漸教と、頓教

肉眼

「肉眼」というのは、普通の凡人のものの見方です。

凡人には、形にあらわれていることだけしか目にはいりません。

それも、往々にして、まちがってみえたり、不十分にしか見えなかったりするものです。

二乗

- ・声聞と縁覚のこと。
- ・大乘と小乗。

二処三会 にしよさんえ

「法華經」が説かれた場所を「二処三会」といって、最初に靈鷲山で説かれ、つぎに虚空において説かれた。すなわち二箇所、三回の説法が行なわれたわけです。

二智 にち

諸法の空理をさとする根本無分別智（実智）と、差別の事相を知る後得智（権智）のこと。

二辺遠離 にへんおんり

仏教では極端な見解を「二」といい、相対立する両極端を離れよと主張します。

二報莊嚴（依正二報） にほうそうごん えしようにほう

仏身（正報）と仏国土（依報）の莊嚴。

入定 にゆうじよう

禪定に入ること。

入定聚不入対 にゅうじょうふにゅうたい

この世で、念仏の行者は、正定聚の位に入り、諸善の行者は入らない。

入聖得果 にゅうしやうとくか

聖者の位に入って証果(さとり)を得ること。

入道 にゅうだう

在俗生活のままで剃髪して仏門に入った男性をいう。

柔軟心 にゅうなんしん

物事にとらわれない心。

入不二の法門 にゅうふにほうもん

煩惱即菩提、生死即涅槃という諸法不二をさとする法門。

如にょ

・真理しんり

・常住じやうじゆうということですが、いつも存在そんざいして変かわることがないということです。

如來にょらい

「如にょ」とは「真理しんり」の意味である。

つまり、如來にょらいとは、真理しんりの世界せかいからこの世よに來現らいげんされたほとけである。

如來にょらいの異いの方便ほうべん

釈尊しゃくそんの説とかれた、弘願くわんと異なる方便ほうべんの法ほう。

人間にんげんは不定ふじようのさかひ

人間界にんげんかいは生滅しょうめつ變化へんかする無常むじようの境界きようかいであるということ。

人師にんし

ひとをみちびししよ
人を導く師匠。

忍辱
にんにく

しのび難きをしのび、耐え難きをたえる心。

涅槃寂静
ねはんじやくじよう

覺りの境地。
さとし きようち

「迷いをすっかり吹き消してしまつてこそ、人生苦というものがすっかりなくなつて、平穩な、安定した生活が得られるのだ」という教えです。

涅槃畢竟の真因
ねはんひきよう しんいん

さとりに至るまことのたね。

能歸の心
のうき こころ

仏智に帰順する衆生の信心。

能化のうけしやうけ所化

能化とは教化きやうけするもので師匠ししやうのこと、所化とは教化きやうけせられるもので弟子でしのこと。

能断のうだん物疑もつぎ

「能く物疑もつぎを断だんして、法ほうを説くこと無異むいなり」です、「物疑もつぎ」というのは、いろいろな疑うたがいという意味です。

能入のうにゅう

よく浄土じやうどに入はいることのできる因いんのこと。

能念のうねん所念

能念のうねんとは信しんずる心こころ、所念しよねんとは信しんぜられる法ほう。



背正はいしやうきじや帰邪

仏教ぶつぎやうの正理せいりに背そむいて、邪道じやだうに帰きすること。

破見 はけん

邪悪な見解をいただき、正見を破壊すること。

破僧 はそう

破和合僧の略。

八邪 はちじゃ

八つのまちがった心と行い。

八正道 はちしょうどう (八聖道) はちせいどう

涅槃寂静に到る道。

すなわち下記の八つである。

正見 しょうけん | 正しい信仰。

正思 しょうし | 正しい思惟。

正語 しょうご | 正しい言葉。

正定 しやうじやう	正念 しやうねん	正精進 しやうしやうじん	正命 しやうみやう	正業 しやうごう
正 ただ	正 ただ	正 ただ	正 ただ	正 ただ
定 めい	念 ねん	進 しん	命 めい	業 ごう
想 そう	憶 おく	努力 どりよく	生活 せいかつ	行為 こうゐ

八難

仏ほとけの教おしえにはいることのできないような八やつのよくない境遇きやうぐうのことをいいます。

八菩薩

正法しやうぽうを護持ごぢし衆生しゆじやうを護まもる。

文殊師利・觀世音・大勢至・無尽意・宝壇華・藥王・藥上・弥勒

八幡大菩薩

全国ぜんこくに二万数千あるといわれる八幡神社やへはたじんじやの大本だいほんは、九州大分県きゅうしゅうおおいちけんにある宇佐八幡宮うさはちまんぐうです、祭神さいじんは現在げんざい、応神天皇おうじんてんのう、比売神ひめしん、神功皇后じんこうこうごうの三柱みはしらとされていますがその起源きげんについては謎なぞが多く、いろいろな学説がくせつが提出ていしゆつ

されています。

八幡神の本地仏が釈尊または阿弥陀如来であるという信仰は有名で、僧形の神像が造られて、今に伝えられています。

八功德水想

常（つね）に仏（ほとけ）を念（ねん）じ、法（ほう）を念（ねん）じ、僧（そう）を念（ねん）ずることを讃（たた）ふ事（こと）。

八宗兼学

三輪（さんりん）・成実（じやうじつ）・法相（ほうそう）・俱舎（くしゃ）・華嚴（けえん）・律（りつ）・天台（てんだい）・真言（しんごん）の八宗（はっしゆ）の教義（きやうぎ）を体得（たいとく）している。

般若

「如来知見（にょらいちけん）」ともいい、本當（ほんとう）の智慧（ちえ）。

般若波羅密

諸法実相（しよほうじつそう）の智慧（ちえ）。

彼岸 ひがん

あちらの悟りさとの岸きし。

非義 ひぎ

理屈りくつに合あわないこと。

比丘 びく

男おとこの出家者しゅつけしや。

比丘尼 びく

女おんなの出家者しゅつけしや。

非権非実 ひごんひじつ

「中道実相ちゅうどうじつさうの教えおしなり」

方便ほうべんと真実しんじつを差別さべつする立場たちばを超こえた絶対真実ぜったいしんじつの教えおしで、中道ちゅうどうとも実相じつさうともいう。

非権非実の理

方便(権)即真実(実)と達観し、中道の理(有無の二辺を離れていること)にかなっていること。

非作の所作

人間の分別を離れ、あるがままにおのずとなされた働き。

卑湿の淤泥

湿地の泥沼に蓮の花が咲くように衆生の煩惱の泥の中に如来回向の信心が生ずることを喻えたもの。

毘沙門天

毘沙門天は、ヴァイシュヴァナを吠室羅末拏と音写して、それが訛つて毘沙門となり、多聞普聞、種々聞と漢訳されています。

インドの古代神話の中では閻魔界に住む悪霊の主長とされていましたが、ヒンズー教の叙事詞「マハーバーラタ」の中ではクベーラと名付けられて財宝福德を司どり、夜叉を家来として雪山中のカイラーサに住んで北方を守護する善神とされています。

仏教にとり入れられてからも、これらの性格がそのままひきついで、須弥山の中腹にあつて、北方を守護

する護法神として崇められています。

「法華義疏」には普聞あるいは多聞の名を解説して、「福德が善く四方に聞こえているから普聞といい、常に如来の道場を護つて法を聞いているので多聞と名づけるのだ」と説いて、護法神と福德神とを兼ねた天神であることを説いています。

悲心招喚

大悲心をもつて浄土へ来れと招きよぶこと。

譬説

譬え話によつて解りやすくお話しになること。

非善

善悪という相対的なものを超えているという意。

畢竟

究極の絶対的なという意。

畢竟依 ひつきようえ

究極の依りどころとなる仏という意。
きゆうきよく ほとけ

畢竟寂滅 ひつきようじやくめつ

煩惱を滅した究極的なさとの境地。
ぼんのう めつ きゆうきよくてき きようち

畢竟涅槃にあらざる ひきようねはん

如来は絶えず生死の迷いの世界で活動されるから、涅槃にとどまらないという意。
にょらい せつぜい せいし まよ せかい かつどう ねはん

必至滅度 ひつしめつど

必ず仏のさとりを得ること。
かなら ほとけ え

第十一願によつて与えられる利益。
だいい がん あた りえき

畢命 ひつみよう

生命の終わること。
せいめい お

ひほうしょうほう
誹 磔 正 法

ほとけ たた
仏の正しき教法をそしること。

ひやくごうそう
白 毫 相

ほとけ
仏の三十二相の一、眉間に右にめぐる白く細い毛のうずまきがあり、そこから光を放つ。

ひやくごうそう
白 毫 相 の 光

しやくごん みけん
釈尊の眉間から放たれた光。
しよほう じつそう みとお ほとけ ちえ
諸法の実相を見通す仏の智慧。

ひやくくしぶつ
辟 支 仏

えんがく
縁覺すなわち体験主義の修行者。

ひやくそくひやくしやう
百 即 百 生

ぜんどうだいし
善導大師の「礼讃」の言葉で、信心の人は一人ももれず往生できるということ。

ひやくほうおんたい
白法隠滞

仏の教えがかくれとおること。

ひやくほうおんもつ
白法隠没

仏法（白法）がこの世から姿を消し去ること。

ひやつぽうみようもん
百法明門

菩薩が初地の位において得る法門のことで、あらゆる法門を明瞭に通達した智慧の意。

ひようしやう
平章

道理を正しく明らかにすること。

ひようぢゆう
平等

ものはみな平等（空）。

びようどうほつしん
平等法身

相対的差別の^{せかい}世界を離れ、^{びようどう}平等の^{しんり}真理をさとした身。

びようどうりき
平等力

阿弥陀仏の^{さんじゅうしちごう}三十七号の一。

阿弥陀仏の^{がんりき}願力は^{おうじようじん}往生人をして^{びようどう}平等のさとりを得させたもつから、阿弥陀仏のことを^{びようどうりき}平等力ともいう。

びんぐ
貧苦

^{ちえ}智慧も^{のつりよく}能力も^{まじ}貧しい者。

ふかく
不覺

^{しんり}真理は^{さと}悟るものではなく、^{ふかく}悟られるものであるので不覺という。

ふかしようふかせつふかしぎ
不可称不可説不可思議

ことばもところも及ばない^{くどく}功德のはかりしれないことをいう。

福智の二嚴

・福徳莊嚴と智慧莊嚴。

福徳莊嚴とは六波羅密行の中の布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五をいう。
智慧莊嚴とは般若波羅密をいう。

不共の利生

諸仏の救いにもれた女人・悪人を往生させる阿弥陀仏の本願のすぐれた独特のはたらき。

不簡善惡の法

善人と悪人とを区別しない教法。

普賢の徳

淨土に往生したものが再びこの世に還り、普く衆生を済度するという大慈大悲の徳。

普賢菩薩

普賢菩薩は無量の行願をすべて具え、普く一切の仏国土に現れるという菩薩です。

六^{りく}牙^{くげ}の白^{はく}象^{しやう}に乗^のる普^ふ賢^{げん}菩^ぼ薩^{さつ}と獅^し子^しに乗^のる文^{もん}殊^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}、釈^{しゃく}迦^{かに}如^{にょ}來^{らい}を中^{ちゆう}心^{しん}とするこの三^{さん}尊^{そん}像^{ざう}は、私^{わたくし}たちになじみ深^{ふか}いお姿^{すがた}です。

この時の普^ふ賢^{げん}菩^ぼ薩^{さつ}は仏^{ほとけ}の理^り・定^{じやう}・行^{ぎやう}の徳^{とく}を司^{つかさ}どる、いわば仏^{ぶつ}陀^だの大^{だい}悲^ひの行^{ぎやう}を象^{しやう}徴^{ちゆう}する上^{じやう}道^{どう}の菩^ぼ薩^{さつ}として、文^{もん}殊^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}と両^{りやう}々^{じやう}相^{さう}ま^{まつ}て仏^{ぶつ}教^{きやう}の理^り想^{きやう}を实^{じつ}現^{げん}するといふ意^い味^みを持^もつ尊^{そん}像^{ざう}です。また一方^{いっぽう}では、単^{たん}独^{どく}で信^{しん}仰^{ぎやう}の対^{たい}象^{しやう}として崇^{あが}められてきましました。

不^ふ二^じの心^{しん}

觀^{かん}ぜられる対^{たい}象^{しやう}（境^{きやう}）の徳^{とく}、すなわち実^{じつ}相^{さう}（絶^{げつ}対^{たい}の真^{しん}理^り）と觀^{かん}する心^{しん}とが境^{きやう}智^ち不^ふ二^じとなつた心^{しん}をいう。

不^ふ惜^{じやく}身^{しん}命^{めい}

法^{ほふ}が第^{だい}一^{いち}であるといふことに徹^{てつ}する事^{こと}。

普^ふ授^{じゆ}

授^{じゆ}は授^{じゆ}記^きのこと。

未^み來^{らい}において最^{さい}高^{こう}のさとりを得^えるであらうことを仏^{ほとけ}が予^よ言^{げん}することという。普^ふ授^{じゆ}とは一^{いっ}切^{せき}衆^{しゆ}生^{じやう}に授^{じゆ}記^きすることという。

不定聚 ふじようじゆ

善ぜんにも悪あくにも定さだまつていない人ひとたちの集あつまりです。

不浄説法 ふじようせつぽう

自じ己この名めい譽よや利り益えきのために説せつ法ぽうすること。

不浄説法ふじようせつぽうのとが

名めい譽よ・利り益えきを求もとめ、他たとの競き争そう心しんから説せつ法ぽうする罪つみ。

布施 ふせ

物ぶつ心しん両りやう面めんからの贈おくり物ものをする。

不断光 ふだんこう

断たえずかがやいている光ひかり。

仏

1. 法身、
2. 報身、
3. 応身、
4. 化身

仏慧功德

仏の智慧と依報（環境世界）・正報（仏菩薩）の功德。

仏眼

あらゆるものの見かたのうちで最高の見かたです。

すべてのものの実相を見通すだけでなく、慈悲の心をもってそれを見るのです。

仏事

すべての人間を教化し済度する仏のはたらきという意味です。

仏所護念

仏が深くお護りになつて機が熟さなければお説きにならぬ教え。

正しくひろまるようにと仏がつねに護り念じておられるということ。

仏足石

仏陀の足跡を石に彫った仏足石は、釈尊のお姿を形にすることを畏れ慎んだ初期の仏教徒達が、
仏足頂礼の敬虔な心から造ったものです。

仏知見

如来の眼で見通されたこと。

仏智無生の妙願力

悟るための智慧をそなえたすぐれた本願の力。

仏の常

仏は常住で、生滅変化しないという意。

不動明王 ふどうみょうおう

「お不動さん」とよばれて庶民に人気があります。
だいにちにようい
大日如来の化身とも言われています。

普遍智 ふへんち

あまねく行きわたる智慧。

分別 ふんべつ

- ・むやみとものごとに好き嫌いの別。
- ・人を分けへだてする。

平生業成 へいぜいごうじょう

平生に仏法にあう機にとりてのことなり。

別異の弘願 べついこうがん

一般の因果の道理にこえずぐれた他力救済の本願をいう。

別願

その人の性格に応じ、才能に応じ、職業に応じた特別の願いです。

弁才智慧

自由自在な理解力および言語表現能力。
四無碍智のこと。

弁才天

ひとえに弁天さまは美人の代名詞なのです、しかし、もともとの役割はひと言でいうと、お坊さんのホステス役なのです。

ある時お釈迦さまが「最勝王経」を説法していますと、弁才天（インド名・サラスバティー）は立ちあがって、「お坊さんでこのお経を他の人に説かれることがあつたら、お助けいたします。

もし、お経の文字を忘れたり、意味がわからなくなったなら、私が記憶しておいて、そっと影からお教えいたしますわ」と誓いを立てます。

総じて弁天さまの御利益は智慧、記憶、弁舌からはじまって名譽、福德などとなっていきます。

また弁天さまは音楽の神様でもあるのですが、インド名が心地よいせせらぎをかなでる大河サラスバティ

を神格化したことによるらしいのです。

日本でも詩歌管弦の仏さまとして信仰を集め、このことから、美音天女とも妙音天女、妙音天ともいわれるようになり、平安貴族の間で信仰がひろまっていったそうです。

ちなみに竹生島（琵琶湖の北部）の弁天さまと鎌倉の江ノ島の弁天、安芸厳島の弁天さまの三つが「日本の三弁天」と言われています。

偏執

自分の考えに固執すること。

辺地

仏の教えとは縁のない極端な世界。

法

・一切のものと。

・宇宙に通ずる真理。

・仏の教えという意味。

・世よの中なかのすべてのものごと。

放逸ほういつむざん無慚むざん

勝手かたて気ままな行動こうどうをし、自己じこの心こころに恥はじることのないこと。

報応ほうおうけ化け

・報身ほうしん・応身おうしん・化身けしん

法王ほうおうじ子し

仏ほとけを法王ほうおうというのに対し、その仏ほとけを嗣つぐぐ位くらゐを得た菩薩ぼさつを法王ほうおうの嗣子ししという意味いみで法王ほうおう子しと名なづける。

宝王ほうおうにょらい如来にょらいの性起しょうぎの義ぎ

如来にょらいの身口意しんくゐのはたらきはすべて法性ほつしやうの顕現けんげんにほかならないと説といていること。

性起しょうぎとは法性ほつしやう現起げんぎの意いで、仏果ぶつかの万徳まんたくは法性ほつしやうそのままのあらわれであるとの意い。

法楽ほうがくらく楽らく

無漏の智慧より生ずる樂で仏法の樂しみである。

法眼ほうげん

「法眼」というのは、芸術的なものの見方です。

報身ほうしん

1. 仏の本体がわれわれの理解できるとような相をとられた仏

2. 弥陀

3. 十方

法世ほうせ

仏の教えを与える。

法説ほうせつ

仏が教えをお説きになること。

ほうどう
方等

平等に救われる正しい教え。

ほうどうきようてん
方等經典

大乘の教え。

ほうにおうじよう
法爾往生

阿弥陀仏の願力にはからわれ往生すること。

ほう
法の常

真理は永遠であるという意。

ほうべん
方便

・正しい手段。

・「実にして虚しからず」

ほうべんりき
方便力

あいて おう
相手に応じた手段。

ぼさつ
菩薩

だいじだいひしゃ
大慈大悲者

ぼさつじよう
菩薩乗

じぶん すく
「自分だけ救われてもほんとうに救われたことにはならぬ、他を救う行動が自分をも救うのだ」という
こうじようしゆぎ
行動主義。

ぼさつどう
菩薩道

ひと はに
人は何をめざして生きていくべきか、その為にいかに自ら修行すべきか、また社会の人々の為に何をなすべきかという人間の生き方。
にんげん い かた
人間

ぼさつ しむい
菩薩の四無畏

「無所畏の心」というのは「畏る所の無い心」。

1. 総持不忘 — 「総べてを持ちて忘れず、法を説くこと無畏なり」。

2. 尽知法藥 — 「尽く法藥を知り、及び衆生の根と欲と性と心とを知り法を説くこと無畏なり」。

3. 善能問答 — 「善く能く問答して、法を説くこと無畏なり」。

4. 能斷物疑 — 「善く物疑を斷じて、法を説くこと無畏なり」。

菩提心

・仏の悟りに達するまで努力していこうという心。

・菩薩になりたいという心。

・無上正覺の心。

菩提藏

仏果をさとらせる教え。

ポツクリ信仰

ポツクリ信仰の縁起は、「往生要集」の著者恵心僧都が母の臨終にあたって、淨衣に着替えさせ、呼吸に合せて念仏を唱えたところ苦しむことなく安樂往生した、という逸話に基づいたもの、といわれています。

その根本には、浄土思想が流れているとされています。

法師ほっし

法師というのは、出家の僧にかぎらないのであつて出家でもよし、在家でもよし、男子でもよし、女子でもよし、いやしくも仏の教えを信じ、持ちそしてそれを世にひろめる努力をなすものはすべて法師です。

報生三昧ほっしょうさんまい

報生とは先天的にそなわっている能力のこと。

八地以上の菩薩は、意志を働かさず、努力をもちいず長時の修行により自然に得たる三昧力をもって、自在に化他の活動をなすことができる。

この三昧をいう。

法性生身の菩薩ほっしょうしやうじんぼさつ

法性真如から生じた身をもっている菩薩。

法性常樂の淨利ほっしょうじやうらくじよつり

永遠なさとりの境界である極楽浄土のこと。

法性のみやこ

人間の虚妄分別を超えた存在(法)の真実なるありようを法性といい、それは王者のいる「みやこ」のように仏のいます安穩なさとりの領域であるからこのようにいう。

法身

仏の本体。

1. 法性法身。
2. 方便法身。

仏の智慧

仏というのは仏陀の略であり、ブツダというのは「覚者」ということです。

すなわち宇宙の真理を覚った人という意味です。

したがって「仏の智慧」というのは、宇宙の真理を覚った智慧、諸法実相を見通す智慧のことです。つきつめていえば「真理の智慧」であります。

梵行 ぼんぎよう

我欲がよくを離はなれた無漏清淨むろしやうじやうの行ぎやう漏もれる事こと無なく清きよらかな行ぎやう

本弘誓願 ほんぐせいがん

阿弥陀仏あみだぶつが因位いんににおいて弘ひろく衆生しゆじやうを救すくおうと誓ちかわれた願がん

本師本仏 ほんしほんぶつ

一切いっさいの諸仏しよぶつは阿弥陀仏あみだぶつを師しとしてさとりをひらいた弟子仏でしぶつであり、淨土じよとより十方じふぱうに出現しゆげんされた阿弥陀仏あみだぶつの分身ぶんしん（末仏まつぶつ）であるから阿弥陀仏あみだぶつを本師本仏ほんしほんぶつという。

本生譚 ほんじやうたん

釈尊しやくそんの前世ぜんせの物語ものがたりでジャータカとも呼よばれる。

凡聖不二 ぼんしやうふじ

凡夫ぼんぶと聖者せいじゃがひとつであること。

煩惱 ぼんのう

煩惱心ぼんのうしんとも言つて、字じの如ごとく「煩わづらい悩なやむ心しん」のことである。

煩惱成就 ぼんのうじょうじゆ

あらゆる煩惱ぼんのうを欠かくことなく具そなへてゐる。

煩惱無辺誓願度 ぼんのうむへんせいがんど (煩惱ぼんのうは無む辺へんなれども誓ちかつて断だんぜんことを願ねがう)

毒どくとなるという貪とん・瞋じん・痴ちの三みつの心しん。

・貪むだほりの心しん

もつと欲しい、という欲よくの心しん、人の物ものまでも自分じぶんの物ものにしたいという、生きて行くのに足りてゐるのに人を傷きずつけても、時には、法ほうを犯おかしてまでも手てに入れようとする心しん。

なすべきことを怠おこり、慎つつしみを忘れ、欲望よくぼうのままに身をまかせてしまふ心しん。

・怒いかりの心しん

怒いかりの心しんは、数百年すうひゃくねんをかけて造つくり上げた大だいこう高こう楼ろうをも、一夜いちやのうちに灰燼はいじんと化かしてしまふ。

また、争あそいを起おこす。

・愚かな心おろこころ

夫婦喧嘩から戦争まで総ては怒りの心からである。

回りの人や物事を正しく判断出来ずに、善意を悪意と受取り逆恨みし、また、甘い言葉に惑わされて身を誤り、自らの行動言語を反省できない愚かな心。このような三つの悪い心を、一つ一つ捨てていく努力を惜しまない。

凡夫往生ぼんぷおうじょう

煩惱を断ちきることができない者が阿弥陀仏の浄土に往生すること。

凡夫直入ぼんぷじきにゅう

凡夫のままに眞実報土に往生せしめられること。

法門無尽誓願学ほうもんむじんせいがんがく

(仏の教えは無尽であろうとも、かならず学びつくそうと誓願する無辺行)

仏の教えは数限りなくあるが、よく学び身に付け、本当のものを見極めることの出来るようになる努力を惜しまない。



まいらせ心まいらせこころ

自分が積んだ善根功德を仏にさしむけようとする自力の回向心。

末代の教行まつだいのきょうぎょう

光明・名号は、末法を救う教えとなり、行となつて、行者のうえに実現すること。

末法まつぽう

仏法が見失われてしまふ時代がやつてくるのです。それを末法の時代といい、末世ともいいます。しかし、それは、人々の目から見失われたにすぎないのであつて、むしろ仏法は永遠不滅のものです。けつしてなくなることはありません。

しかも、こういう末法の世にこそ、仏の教えが必要であり、その真価が発揮されるのです。

摩羅記まらき

五官を慶ばせ、正しい善を破り、悪を増長させる魂。

摩利支天

摩利支天は、インドの名マリーンをそのまま音写したもので、その意味は陽炎とか威光と訳されています。この摩利支天も、インド古来の神として登場していましたが、「バアガヴァッドギーター」という古代聖典には風神としてその名がでています。

摩利支天は女神で梵天の子、又は日天の妃とされて、よくその身をかくし障礙をのぞいて利益をます神さまとして信仰されていました。

万行の少善

念仏を多善根、多功德というのに対し、それ以外のあらゆる行（万行）を少善とする。

未証浄心の菩薩

初地から七地までの菩薩のこと。

この位の菩薩は、まだ自他へのとらわれが残っているのです、自利利他するのに作心（強い意志力）を必要とする。

しかし八地以上の菩薩は、一切のとらわれをはなれ、作心をもちいず自在無碍のはたらきをするから浄心

の菩薩ぼさつという。

微塵劫みじんごう

はかりしれないほど長い時間ながじかん。

微塵の故業みじん こごう

・無数の古い業むすう ふるい ごう。

・無始以来の悪業むしいらい あくごう。

みつぎよう

密行

密行みつぎようというのは、自分じぶんは悟さとつていてもそれを表おもてに現あらわさないうで、凡愚ぼんぐのごとく人ひとにたちまじりながら、自然しぜんと人ひとを導みちびいていくことをいうのです。

密益みつやく

行者ぎやうじやの表面ひやうめんに明あきらかにあらわれない利益りえき。

信心しんじんの徳とくとしての利益りえきをいう、顕益けんえきに對たいする語ご。

名一義異 みよういちぎい

名は一つで同じであつても、その意味が異なること。

冥加 みようが

凡夫の方からは見えないけれども、仏祖の加護を被っていること。

妙覚 みようがく

菩薩五十二位のうち第五十二位の最後の果位で煩惱を断ち切つて悲智がまどかに具わつた位。
まことのほとけなり。

名願 みようがん

名号願力のこと。

名願力 みようがんりき

名号のこと、名号には衆生救済の本願力がこもっているから名願力という。

名義俱異

語も、その意味もともに異なること。

明行足

智慧と行とが共に完全である方。

冥見

仏菩薩がつねに衆生を見ておられること。

冥衆

梵天・帝釈天・鬼神等、人の目に見えない神的存在。

名体不二

名号には仏徳のすべてが摂在しているから名号と仏体とは一体不二であること。

みようもん

名聞

みずか
自らの名誉を求める心。

みようもんりよう

名聞利養

めいよく
名誉欲と財産欲。

みようり

名利の大山

めいよしん
名誉心や物質的欲望の大きいことを山に喩えている。

みようりよう

冥慮

しよてんぜんじん
諸天善神のおぼしめし。

ぼんぶ
凡夫には見えない仏のおぼしめし。

みらいきいつ

未来機一

みらい
未来においては機根は一つだという意味です。

未来教一

未来においてはすべての教えがかならず仏の教えに帰一するのだという意味。

未来行一

現在においては人々の行いは善悪さまざまであるけれども、未来においては、すべての行いが「仏さまのみにかなう」という一点において一致するようになる。

未来人一

これも、やはり未来のことを予言してあるのであって、現在は仏の教えを知らない人もあり、それに触れる機会があつても深くはいろいろとしない人もあり、さまざまな段階の人がいるけれども、未来においては、かならず、すべての人が仏さまに帰命するときがくるというのです。

未来理一

あらゆる衆生が、仏の教えによつて完全に真理に合つた生きかたをするようになれば、天上界とか娑婆世界とか、地獄世界とかの区別がなくなつて、この世はこのまま仏の世界になるというのです、すなわち、真理はあくまでも一つであるから、未来において、いつかはすべてのものがこの一つの真理のレ-

ルの上^{うへ}にのつて、完全^{かんぜん}な調和^{ちやうわ}のある世界^{せかい}をつくりあげることができるとい^い意味^みです。

弥勒菩薩^{みろくぼさつ}（マイトレーヤ菩薩^{ぼさつ}）

その弥勒^{みろく}とは慈^{いつく}しみ深^{ふか}い、友情^{ゆうじよう}ある」とい^い意味^みをもつ梵語^{ぼんご}マイトレーヤの音訳^{おんやく}で、茲^じ氏^しと意識^{いやく}されます。歴史的^{れきしてき}にはイランの太陽神^{たいうしん}ミトラとその類縁^{るゑん}関係^{かんけい}にあるヴェーダの契約神^{けいやくしん}ミトラに由來^{ゆらい}することから、仏教^{ぶつぎやう}にいたつて「契約^{けいやく}、約束^{やくそく}」に關連^{かんれん}する未來^{みらい}仏^{ぶつ}の性格^{せいかく}が付与^{ふよ}されたのでし^しよう。

仏教^{ぶつぎやう}の教^{おし}えでは、仏^{ほとけ}となる資格^{しかく}を持^もちながら、現在^{げんざい}は菩薩^{ぼさつ}のまま^{まま}で、弥勒^{みろく}の住所^{じゆうしよ}である兜率天^{とそつてん}で修行^{しゆぎやう}しているが、釈尊^{しやくそん}の滅後^{めつご}五十六億七千万年^{まんねん いっせつ}（一説^{いっせつ}には五億七千六百万年^{まんねん}）、人^{ひと}の寿命^{じゆみやう}が八万四千年^{まんねん}になつたときこの世^よに降^おりてきて龍華樹^{りやうげじゆ}のもとで成道^{じやうどう}し、釈尊^{しやくそん}の救^{すく}いに洩^もれた衆生^{しゆじやう}を救^{すく}うとされていま^{いま}す。

そのために、釈尊^{しやくそん}の跡継^{あとつぎ}ぎで、未來^{みらい}の救済^{きうさい}を約束^{やうそく}された未來^{みらい}仏^{ぶつ}、弥勒^{みろく}如来^{にょらい}ともいわれるのです。わが国^{くに}の弥勒信仰^{みろくしんぎやう}の初め^{はじ}は、五八四年^{ねん}に蘇我馬子^{そがのうまこ}が百濟^{くだら}から獻上^{けんじやう}された弥勒^{みろく}仏^{ぶつ}を石川宅^{いしかわたく}に祀^{まつ}つたとい^いう「日本書紀^{にほんしよき}」の記事^{きじ}が最初^{さいしよ}のものです。

無^む

無差別^{むはべつ}

無^む畏^い

・梵語ヴァイシャーラドヤの漢訳。

・無所畏とも漢訳する。

1. 何事にも恐れることのない智慧をもって説法すること。

仏・菩薩の徳の一。

2. 仏のこと。

3. 涅槃の異名

無^む為^い泥^{ない}垣^{おん}

涅槃のこと。

無^む為^いの心^{こころ}

自己中心でない心。

無^む為^い無^む漏^ろのさかひ

常住不変であり、煩惱のないさとの境界。

無縁むえんの慈じ

平等びやうどうにして無差別むさべつな仏ほとけの大慈悲だいじひ

無縁むえんの慈悲じひ

一切いっさいのものを平等びやうどうに救すくう大慈悲だいじひ

無我むが

この世よには、自分じぶんだけで存在そんざいしているものはひとつもないのだから、小さな自我じがに執着しゆうちやくしてはならぬと
いうこと。

無蓋むがいの大悲だいひ

いかなることにもおおい隠かくされることのない大慈悲だいじひしん心。

無学むがく

煩悩ぼんのうを断だんじ尽つくして阿羅漢あらかんのさとりをひらいたもの。

無記むき

善ぜんでも悪あくでもないもの。

無行不成むぎようふじようの願海がんかい

本願ほんがんの名号みょうごうにはあらゆる万行まんぎやうが円満えんまんされており成就じやうじゆされない行ぎやうがないこと。
したがって名号みょうごうを回向えきやうされることのでいかなる悪衆生あくしゆじやうも往生おうじやうを得えることが可能かのうとなる。

無垢輪むくりん

煩惱ぼんのうのけがれない仏ほとけの教法きやうぽうのこと。
仏ほとけの教法きやうぽうは衆生しゆじやうの煩惱ぼんのうを打ちくだき、次々つぎつぎと教化きやうかするのを車輪しやりんが回まわつて到いたる処ところへ転てんすることに喩たとえている。

無碍光むげこう

煩惱ぼんのうに障さえられない光ひかり。

無碍難思むげなんじの光耀こうよう

何物なにもものにも妨さまたげられない、凡夫ぼんぷの思慮しりよを超こえた阿弥陀仏あみだぶつの智慧ちえの光明こうみやうのこと。

無碍人 むげにん

無碍の徳を成就した諸仏のこと。

無間長時に修すべし むけんじょうじ しゆ

疑いをまじえず、一生涯念仏を称えよ。

無作 むさ

あくまでも平等に扱ってゆかねばならぬ。

無慚無愧 むざんむぎ

人に恥じる心もなく、天に恥じる心もないさま。

無宿善の機 むしゆくぜん き

仏法を聞く機縁の熟していない人。

無常 むじょう

この世には、いつまでも同じ状態であつてゆくものごとはない。すべては移り変わるものだということ。

無上覺 むじょうかく

この上ない仏のさとり。

無称光 むしやうこう

説き尽くせない光。

無上上 むじょうじょう

涅槃の異名。

この上もなくすぐれているという意。

無上大利 むじょうだいり

このうえもない大きな利益。

無上涅槃 むじょうねはん

小乗仏教に説く消極的な涅槃に対して、自利利他円満の大乗の涅槃をいう。

無生の生 むじょうしやう

無生無滅の生 むじやうむめつしやう

浄土の往生は生滅(迷い)を超えたものであることをいう。

無上の信心 むじやうしんじん

無上の徳をもつ如来回向の信心 むじやうとくをもつにやういさうしんしん

無上菩提 むじやうぼだい

仏の智慧を得たいという願い。無上最高のさとり。

無上菩提誓願證 (菩提は無上なれども誓つて證せんことを願う) むじやうぼだいせいがんとう

限りなく人格の向上に努める。

昨日よりは今日、去年よりは今年、さすがに年だけのことはあると、人様に敬われ慕われるようになる努力 きのうよりけふきょう、こぞよりけふとし、さすがにとしだけのことはあると、ひと様にうやまわれしむられるようになるどりよく

を惜おしまない。

無相むそう

- ・すべてのものの区別くべつを超越ちようえつした本性ほんしやう
- ・すなわち実相じじそう
- ・諸法しよぽうの実相じじそうはすべて「空くう」であること。

無相離念むそうりねん

浄土じやうどの事相じそう・仏ほとけの相好等さうごうどうを觀かんぜず、真如しんじゆ法性ほふしやうの理りを直接さうくせつ、觀かんすること。
色いろもなく、形かたちもない法身ほふしん真如しんじゆを觀かんする念ねんは無念むねんであるから、法身念仏ほふしんねんぶつをこのようにいう。

無对光むたいこう

菩薩ぼさつの智慧光ちえこうの及およばない光ひかり

無等智むとうち

ならびなき智慧ちゐ

無等むとうどう等

阿弥陀仏あみだぶつの異名いみょう。

仏ほとけの悟りさとはくらべもののない絶対平等ぜつたいびやうどうのものであること。

無念むねん

・分別ぶんべつ的な限定げんていを超えた無相むそうの真如しんにょにかなう無分別智むぶんべつちのこと。

・無相離念むそうりねんの理觀りかんのこと。

・形相ぎようそうをはなれて理りを觀かんじ、真理しんりと一体いつたいになること。

無辺光むへんこう

縁えんのある全すべての衆生しゆじやうを照てらす光ひかり。

無明品心むみょうほんしん

一切衆生いっさいしゆじやうの愚痴無明ぐちむみょうの品類ほんるいに属ぞくする心こころ。

無名無実むみょうむじつに

実質じっしつのともなわないこと。

ここでは、名号みょうごうの実義じつぎをこころにかけないこと。

無無義むむぎ

無義むぎでない語ごのことで、仏ほとけのお言葉ことばには何なに一つ無意味むいみなところはないということ。

無問自說經むもんじせつきよう

問といがないのに仏ほとけが自らみづかすすんで説とかれた經典きよつてん。

無益むやくの語ことば

つまらないことばかりおしゃべりすること。

無余涅槃むよねはん

煩惱ぼんのうを断たじ尽くきただけでなく、肉体にくたいもまた無むに帰きしたさとの状態じょうたいのこと。

煩惱ぼんのうを断たち切きつてなお、肉体にくたいを残のこしている有余涅槃うよねはんに對たいする語ご。

無量光
むりようこう

計り知れない量の光。
はかりし りよう ひかり。

無量光明慧
むりようこうみょうえ

・はかり知れない阿弥陀仏の智慧。
あみだぶつ ちえ。

無量光明土
むりようこうみょうど

阿弥陀仏の眞実報土の異名。
あみだぶつ しんじつほうど いみょう。

無漏の依果
むろ えか

煩惱を離れた国土。
ぼんのう はな こくど。

漏は煩惱の異名。
ろぼんのう いみょう。

依果は衆生の依り所となる環境世界。
えか しゆじょう よどころ かんきょうせかい。

無漏無生
むろむしやう

煩惱ぼんのうのない不生不滅ふしよふふめつ。

明師めいし

智慧ちえのすぐれた師し。

瞑想めいそう

三昧さんまい（精神統一せいしんとういつ）

滅罪得生めつざいとくしょう

罪つみを消けして生うまるることを得える。

滅諦めつたい

あらゆる煩惱ぼんのうを滅めつし去さつたところ。

毛孔放光もうくほうこう

釈迦牟尼しゃかむにの全身ぜんしんから美しい光ひかりがでたさま。

妄見 もうけん

みだりのおもひなり

妄念 もうねん

真理に背反した迷いの心。

聞光力 もんこうりき

弥陀の御誓を信じまいらするなり。

文殊菩薩 もんじゅぼさつ

文殊菩薩とは文殊師利菩薩（文殊師利法王子）の略称で、大乘仏教で最初に現れ、最も古くから尊敬されてきた重要な上首の菩薩です。

俗に「三人寄れば文殊の智慧」といわれる文殊菩薩は、普通、普賢菩薩と共に釈迦如来の脇侍として、仏の智・慧・証の徳を司るとされる、仏陀の智慧を人格化した菩薩といえるでしょう。



薬師如来

人間と病氣、この永遠に切り離すことができない因果関係ゆえに、人は永遠に神仏を治病の手段として見据えていくのでしよう。

その最高峰に位置する仏さまが薬師如来、お薬師さまの原名は、「パーサシャルロヘイルリヤバーシバカラージャヤ」という長い名前です。

パーサシャとは薬、ルロは師、ヘイルリヤは瑠璃色、バーシバは光、カラージャヤは王という意味を持ちます。

これが中国に伝来して漢訳され「薬師瑠璃光王如来」となり、さらに略して薬師如来になったといわれます。

お薬師さまは、「薬師如来和讃」のなかで、十二の誓願を挙げられています。そのすべては人間の日常生活に密着した苦悩を救済するための誓願になっています。

ことにその第七誓願に「衆患悉除」があり、人間の一切の病根を治癒させる、とあります。

これがお薬師さまを病氣平癒の仏さまとしてその地位を不動にした所以でしょう。

唯知作惡の機

ただ悪を作ることをつくるのみ知る衆生。

唯仏独明了

ただ仏のみがひとり明らかにさとしていっているということ。

与奪

他の教義をいったん承認した上で、それを超える自宗の教義を打ちだし、他の教義の本質的意義を奪い取ること。

余の仏聖

阿彌陀仏以外の仏菩薩等の聖者。



楽波羅蜜

真しんの心こころの平へい和わをえ得える修しゆ行ぎやう。

羅網らもう

宝珠ほうじゆで飾かざつた網あみ、梵本ぼんぽんでは鈴すずのついた網あみ。

欄楯らんじゆん

装飾そうしきをほごした垣かき。

利行満足りぎようまんぞく

自利じり利り他たの二利にりの行ぎやうが満まん足ぞくする菩ぼ薩だつ行ぎやうの完かん成せいをいう。

利他円満りたえんまんの妙位みやうい

他力たうより与あえられた功徳くどくの欠かけめのないすぐれた仏ほとけの位くらゐ。

律僧りつそう

回律かいりつを嚴守げんしゆする僧そう。

立相住心

阿弥陀仏の相好功德を説いて相好に心を集中して観じさせること。

略解言趣

「仏の寿命は無限である」という、きわめて簡単なように見える教えの中にこめられた大きな意味を理解することは仏の智慧に近づく第一歩であるというわけです。

信仰が進んでここまで達した段階を「略解言趣」と天台大師は名づけられたのです。

竜華三会

弥勒菩薩が、兜率天から、釈迦滅後五十六億七千万年の後に、この世に下生して、竜華樹の下でさとりをひらき、大衆の前で三回説法すること。

流通分

正宗分に書いてあることをよく理解し、信じ、そして身に行えば、どんな功德があるかということ説き、だからこれを大切にして、あまねく世にひろめよ、そういう努力をする者には、こんな加護があるのだよ、

ということを説かれた部分。

利養

みずか
自らの利益を追い求める心。

輪廻

死んでからのわれわれはどうなるのでしょうか。

仏教の教えでは、われわれの生命は、死後も一定の期間は『中有の身』としてこの世にのこっており、その期間を過ぎると前世に積んだ業の果報によつて、それにふさわしいところに生まれ変わるものと説かれています。

すなわち、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覺界、菩薩界、仏界の十界です。仏教では、世界はこういう成り立ちになっているとかんじているのです。

それで、もしわれわれが迷つたまままで死にますと、その魂はまたもとの「無明」の状態にかえつて、もうろうたるままに、また新たに迷いや苦の世界（六道）へ生まれ変わりそこでまた十二の段階を通過して、老死に至るのです。

そして未来永劫にそれをくりかえさなければなりません、このことを輪廻といっています。

流転生死るてんしやうじ

輪廻りんね。三界六道さんかいくどうの迷いまよの世界せかいを生まれかわり死しにかわりして流転るてんすること。

六境ろくきやう

色しき・声こえ・香かう・味み・触しょく・法ほう

六牙ろくげ

六波羅密ろくはらみつをかたどつたもの。

六種地動ろくしゆじどう

天地てんちのあらゆるものが心こころから感動かんどうしたことを表あらわしています。

六親ろくしん

・六種ろくしゆの親族しんぞく。

・父・母・兄・弟・妻・子。

六道

地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天。

六念

六随念・六念処ともいう。

仏・法・僧・戒・施・天をそれぞれ、他のおもいをやめて、心静かに念ずること、すなわち、念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天をいう。

六波羅密

布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧。

六和敬

同行者が信仰生活や日常生活のいろいろな面において、お互いにうち解けあい、敬いあつていかなければならぬことを教えられたもので次の六つをいいます。

・身しん和わ敬きやう

・口く和わ敬きやう

・意い和わ敬きやう

・戒かい和わ敬きやう

・見けん和わ敬きやう

・行ぎやう和わ敬きやう

漏ろう尽じん比ひ丘きやう

一切いっさいの煩ぼん悩のうを断だんじ尽くした比ひ丘きやう。

六ろく根こん

眼げん・耳に・鼻び・舌ぜつ・身しん・意いという六ろく種しゆの感かん覚かくおよび知ち覚かくの器き官かん。



和わ顔がん愛あい語ご

和なやかな顔かおと愛あい情じやうをこめたことば。

和わ光こう同どう塵じん

仏ほとけ・菩ぼ薩さつが衆しゆ生じやう济さい度どのためその威い光こうを和やらげて神かみとなり、この世せ界かいの煩ぼん悩のうの塵ちりに応おう同どうして衆しゆ生じやうに縁えんを結むすぶ。

編著者の思い

現在の世相ほどずさんだ世相はないのではないのでしょうか？ 親が子を殺し、子が親を殺す。また金を得る目的でガソリンを撒き火を付けて人を殺す。そのような殺伐とした世の中になったのは何故でしょうか？

今聞かなくなつた言葉といえ、それは「有難う」の言葉ではないのでしょうか？ 「有難う」とは仏教用語で、有うこと難（かた）し、つまり仏教でいう「一期一会」の言葉であると同時に、感謝の気持ちを表す言葉です。この人や物、行動に対し、感謝の気持ちを持つことにより、人間関係や世渡りの潤滑油となり、自分自身の心が豊かになるのです。心が豊かになれば、人生における四苦八苦の煩惱から脱却でき、希望のある人生設計が描けるのです。21世紀は「心の時代」であるといわれています。「心の時代」とは言つても、十人十色の心があります。十人十色の世界があるのです。

この本は一宗一派に囚われた仏教用語ではないつもりです。巻末に記した参考図書にもあるように、多宗派にわたつて著者が読んだ仏教書を基に著者が理明らなかつた仏教用語を大学ノートにまとめ、解説を入れ、五十音順に整理したのですが、何分未熟者故、乱筆乱文があると思いますが、この本を手元に仏教書を読んでもいただき、お釈迦様が説かれた仏法の教えを、この乱れた世に広める燭灯にしていただければ幸いです。

仏法を理解し広めることで、21世紀が心の時代となり、人が人らしく生き、生きとし生くるものが、生きてゐる喜びを感じることが出来る世の中に変革出来るのではないのでしょうか？ 住みよい社会、楽しい人生、生きがいのある生活を、我々子孫のために引き継いでいきたいものです。

仏教とは、本来、悩める現代人が求めてやまない、

「生きやすく生きるための教え」であり、個人的シミュレーションに勝る「真理へのシミュレーション」である。

「戦争や殺し合いは歴史に書き残されるから目立ちますが、その陰で誰にも知られず人を愛し助けてきた慈悲の心を持つ人たちが、殺したり憎悪したりする人よりもはるかにたくさんいたからこそ、人類は生き残っているのです」

参考図書

- 一、大法輪五十八卷（平成三年）第七号
- 一、大法輪五十八卷（平成三年）第九号
- 一、大法輪五十八卷（平成三年）第十号
- 一、大法輪五十八卷（平成三年）第十二号
- 一、大法輪五十九卷（平成四年）第五号
- 一、大法輪五十九卷（平成四年）第八号
- 一、法華經の新しい解釈 全 庭野日敬 著
- 一、図説般若心経 金岡秀友 著
- 一、佛説無量寿經 卷上・卷下
- 一、「心が明るくなる、身が軽くなる」 大室了皓 著
- 一、禮拜聖典
- 一、浄土真宗聖典



竹下 博 (たけしたひろし)

1948年 (昭和23年) 1月15日生 北九州市小倉北区

1966年 (昭和41年) 福岡県立小倉工業高等学校機械科卒業

1970年 (昭和45年) 私立 福岡大学工学部機械工学科卒業

1970年 (昭和45年) 日本国有鉄道九州支社入社

1987年 (昭和62年) 国鉄改革に伴いJR西日本移籍

現在 (平成15年) JR西日本福岡支社 博多総合車両所

総務科勤務

子と思う 親の心が 阿弥陀かな

有心 仏心 慈悲心

人それぞれ心あり その心とは
ほとけ心なり ほとけ心とは慈悲の心なり

竹下 博

仏教用語集

2001年10月30日 初版 発行
2003年1月31日 第2刷 発行

編著者 — 竹下 博
発行者 — 田中久雄
表紙画 — 吉田令一
編集 — 株式会社かんぼう



大阪市西区江戸堀1丁目2番14号 (〒550-0002)
電話・……(06)6443-2171 / FAX・……(06)6443-2175

印刷／製本・……株式会社 淀川工技社